養老町の古道

九里半街道
伊勢街道
養老街道
津島街道
多良街道

発刊にあたって

今回、郷土の文化財を調査整理していただいている郷土資料館協議会の委員の手で、養老五街道の九里半街道、伊勢街道、養老街道、津島街道、多良街道についてまとめられ、冊子として刊行されることになりました。又協議会のご尽力でこの一年間、歴史資料館で「特別展」として街道に関係のある資料を展示・公開していただきました。この企画は、皆さんにいい学習の機会を与えてくださいました。

養老の地はづいと昔から西に京都、大坂、南に伊勢、東に尾張、更に江戸があります。このことは人々の生活に多くの影響のあったことは当然であります。

現代社会は、科学技術の進歩や国際化の進展など、変化の極めて激しいものがあります。これは、交通の発達によること大なるものがあります。私達は文明を享受することを当然のこととして、それを追い求めているのであります。

「温故知新」私達の先祖が営々と築かれた郷土養老の歴史を知ることは、今の生活を充実させることにつながるものと思います。このような気配の高まりを養老町に窺がえることは誠に嬉しいことです。

道は昔から、人々の社会生活と密接な関係があります。今回、特に養老とかかわりのある五つの街道の発達や変遷についてまとめられたことは意義深いことと存じます。執筆、編集にご尽力いただいた協議会の委員の方、ご協力いただいた町内の皆様に深く感謝と敬意を表します。

平成七年三月

養老町教育委員会
教育長　高　木　正　義

はじめに

道は、先ず誰か一人が最初歩いたあとを二人目、三人目が歩き、ついに万人が歩きつづけた歴史の遺蹟であります。

人びとは、道によってつながり、心をかよわせ、日々の生計を立てていましたが更に、道は広く、遠く、広域につながっていきました。

養老町の地域は美濃・尾張・近江・伊勢の国ぐにに囲まれ古い時代から東海道・中山道・伊勢街道・美濃路を幹線として九里半街道・養老街道・津島街道・多良街道などがその支脈としての機能をはたしてきました。

古い時代では、日本武尊の悲しみの御帰還があり、壬申の乱では馬蹄がとどろきわたり、元正天皇・聖武天皇のめでたい行幸もありましたが、中世・近世に於ける郷土の九里半街道・伊勢街道・養老街道・津島街道・多良街道など五つの街道は、物資交流経済の道、文人墨客風流の道、庶民交遊の道、伊勢参宮など信仰の道として、時には戦乱に利用されたことがありましたが、道は人びとの生活の場そのものでありました。

道路は、時にはその道順の変更をまぬがれ得なかったとしても、脈脈たる日本の歴史・郷土のありし姿を物語っています。

日常、なにげなく往来し、散歩し、時にはつくしを摘み、よもぎを採っている、何の変わりもなさそうな道が実は何百年の昔から祖先たちのわらじによって踏みかためられた道であり長い歴史の重なり積まれた遺蹟であることを知った時、或は路傍に残るくさむらが、数百年も前に苦心を重ねて成功した新田開発の輪中堤が今日では取壊されてしまった僅かな残部であることを知った時など誰しも時代の流れとそこに織りなされた歴史の重みに頭をたれずにおれなくなります。

しかし、歴史は時日とともに人びとの記憶のかなたにかすんでいくものであります。せめて及ばずながらも一語部（かたりべ）として郷土の街道について語り残しておきたいとのわれわれ郷土資料館協議会委員の念願を結集したのが、この小冊子であります。

【目　次】

○はじめに
1・九里半街道……3
2・伊勢街道……23
3・養老街道……37
4・津島街道……55
5・多良街道……69
○用語解説・参考文献……87

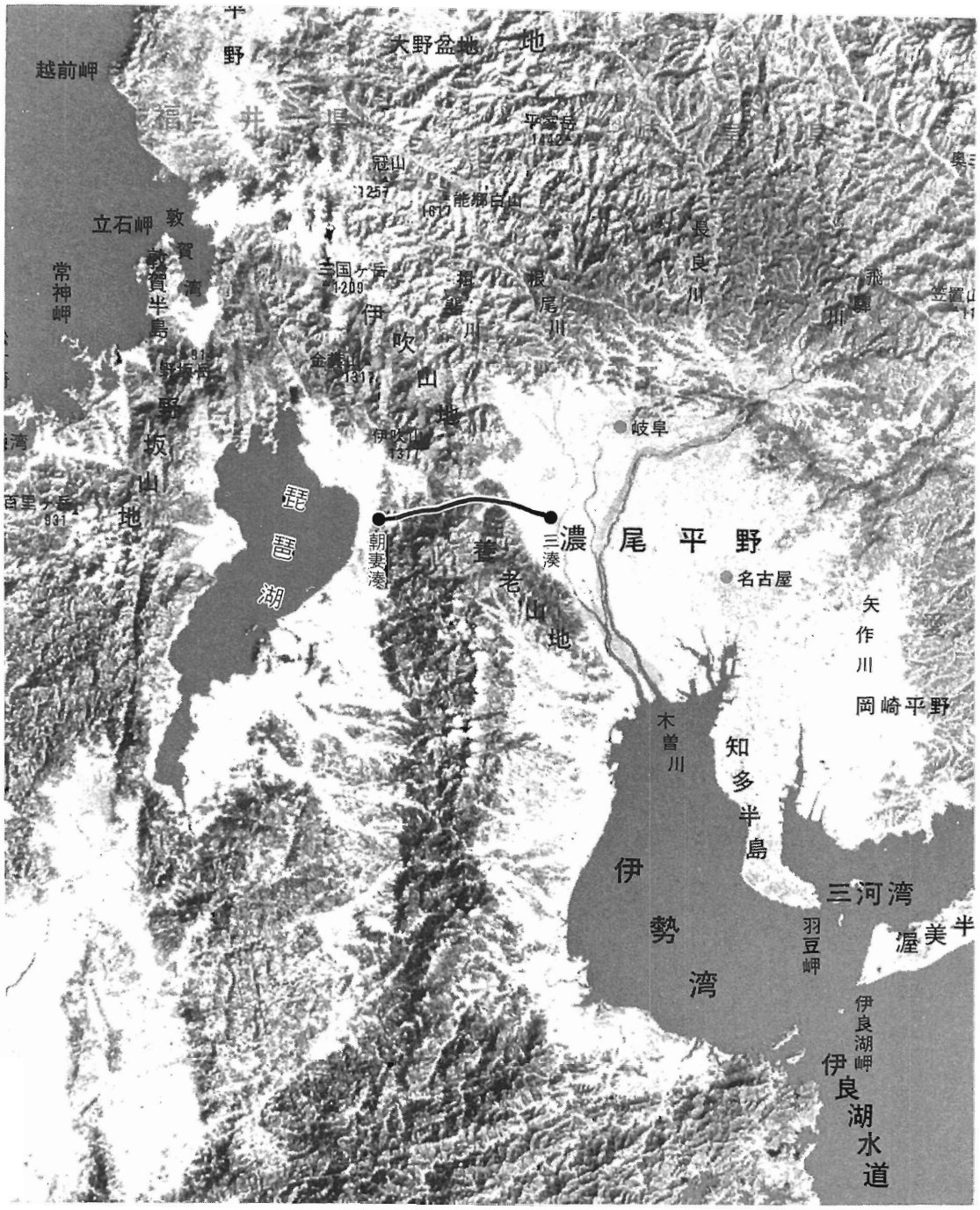
本文中の＊は、用語解説がしてあります。

九里半街道

九里半街道（九里半回し）

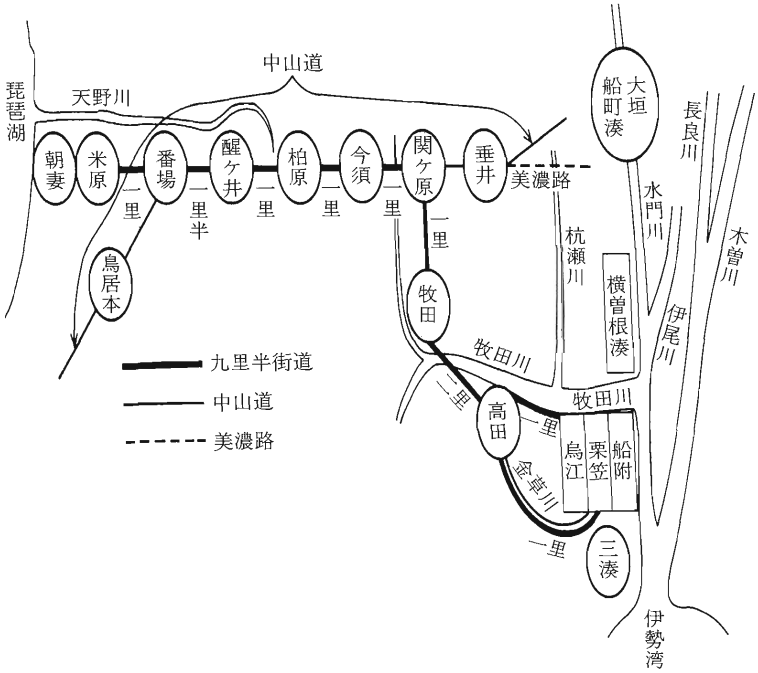
朝妻湊 ―――――――― 濃州三湊（船附・栗笠・烏江）

東日本と西日本
太平洋側と日本海側 ┐ を最短・最速・最低賃金で結んだのが九里半街道であります。

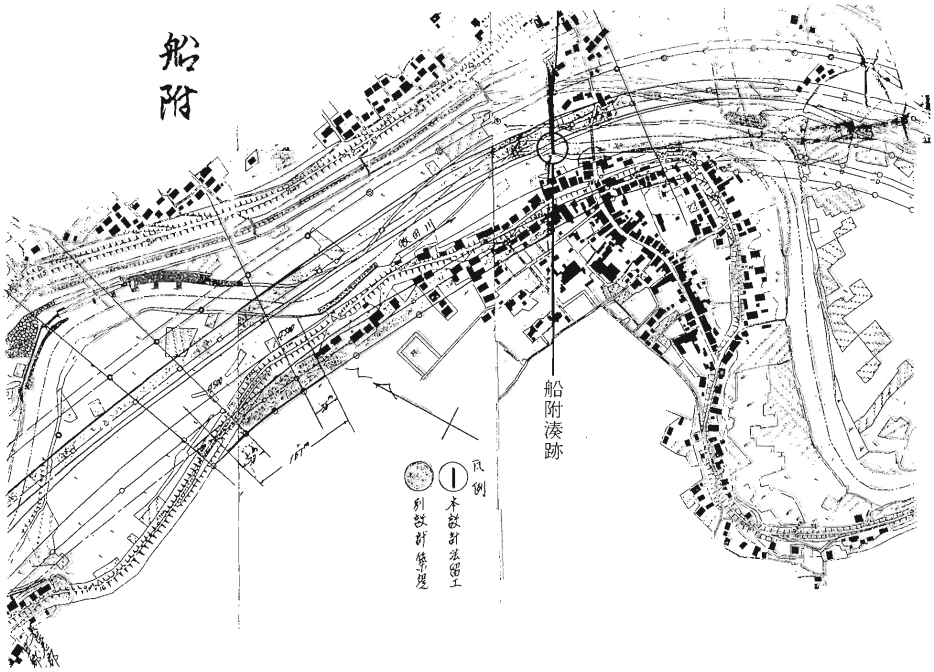


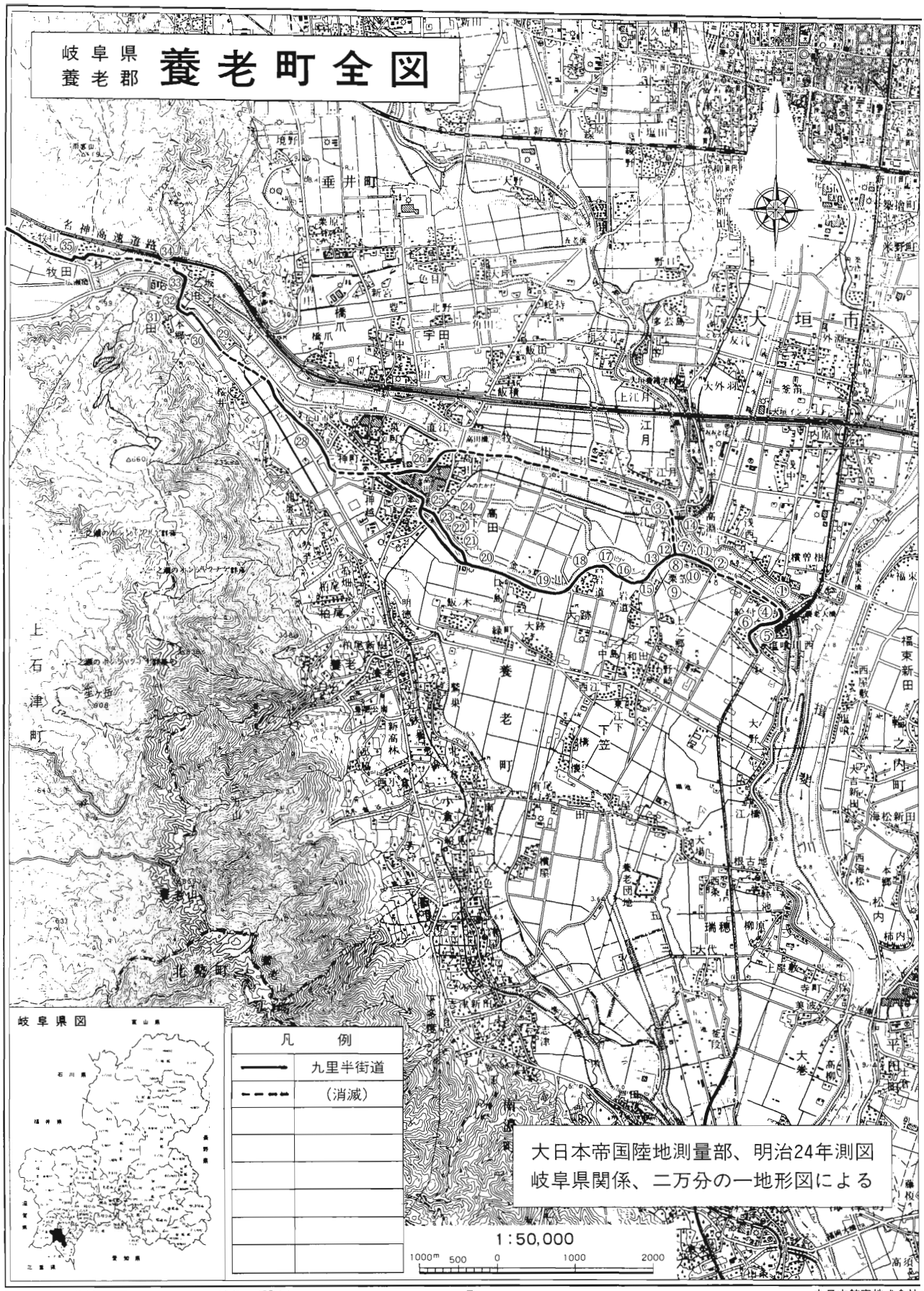
（日本列島大地図館　小学館による）

濃州三湊と九里半街道



牧田川・杭瀬川分流前の船附
（昭和23年頃）
（建設省牧田川出張所蔵）





「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 昭59総複、第188号」

中日本航空株式会社

九里半街道の概要

日本列島は、奥羽地方から中国地方にかけて、高い山脈がつらなっているので、太平洋側と日本海側との間の人の交通や物資の流通がたいへん困難でした。ただ、伊勢湾と琵琶湖とを結ぶ場所は山脈の切れ目で高い山はなく、距離も短いので、太平洋側と日本海側とを結ぶにはまことによい交通路でありました。この場所は昔から中山道が通じており、現在は国道二十一号線・名神高速道路・東海道本線・東海道・山陽新幹線など重要な交通路に当っています。

また、大海を渡ることのできる丈夫な大型船を造る技術のなかった時代では、東日本と西日本の間の物資の交流にも、この交通路はとても安全な通路でした。

ところが、昔は車が発達していなかったので、陸上を通って物資を運ぶには、軽い荷物は人夫が背負って運び、重い物は馬が背に積んで運びましたが、人夫や馬で運ぶよりは船に積んで運べば、一度にたくさんの荷物が速く運べるし、重い物でも船で運べ楽に運べました。特に木材は大へん重いので陸路を運ぶのはとても困難でしたが、筏(いかだ)に組んで水上を運ぶ方法がとられました。

このように、陸上交通よりも水上交通の方が有利であったので、伊勢湾に注ぐ木曽川の支流伊尾川（揖斐川）の支流である牧田川を上ったところに船附・栗笠・烏江の三湊のほかさらに上流の高田にまで川湊(みなと)が発達しました。高田湊は早くも江戸時代の初めに衰えてしまいましたが、船附湊・栗笠湊・烏江湊は濃州三湊といわれて非常に繁栄し、琵琶湖岸にあった朝妻湊(あさづま)（現、米原町）との間に物資の交流が盛んに行われました。この三湊と朝妻湊とを結ぶ陸路が九里半（約三八(きゅうりはん)）あったので九里半街道とか九里半廻(まわ)しと呼ばれました。

朝妻湊は、古い時代から湖上交通の要地とし名高く、奈良、平安時代から江戸時代にかけて栄えました。この頃に始まったとされる筑摩の鍋冠祭が今に伝承されています。

木曽義仲や織田信長の軍が都へ向って船出したのも、この湊からでした。

朝妻湊址

九里半街道は牧田川の右岸堤を上って行く道と、牧田川の支流金草（かなくさ）川の右岸堤を上って行く道と栗笠で二つに分かれ、高田で一本に合して五日市を通って沢田に入り、沢田から牧田川を越して乙坂へ渡り、牧田宿を経て関ヶ原宿で中山道に合し、番場宿で中山道から分かれて朝妻湊へ通じました。

太平洋側と日本海側、東日本と西日本の物資交流を一番短距離に、一番速く、一番安い運賃で行い、交通・運輸・経済・文化の発展に重要な役割をはたしたのが九里半街道でした。

三湊が湊としての機能を果して来たのは徳川幕府の初め頃からと推測されます。

主な荷物

上り荷物（京都・北陸方面への荷物）としては

木曽の木材、静岡・加茂・武儀の茶、伊勢の塩、常滑の陶器など。

下り荷物（江戸・尾張・伊勢方面への荷物）

菜種油、時・多良の木炭、大和の綿、米など。

船問屋は、烏江湊は吹原家、栗笠湊は佐藤家、船附湊は安田家が勤めましたが、尾張藩の庇護を受けていたため非常に繁栄し、政治上にも大きな発言力を持っていました。

三湊が衰えた原因

1、内陸輸送が少なくなった。

大きな船を造る技術が発達し、海上輸送が多くなり、荷物が三湊を経由しなくなった。

2、牧田川の舟行が不便になった。

牧田川の川底に土砂が積って大きい船が通れなくなり、途中で小さい船と荷物の積みかえをせねばならなくなり、荷物の到着がおくれ、運賃も高くなった。

3、大垣の船町湊が発展した。

荷物が三湊を経由しないで、水門川を通って船町湊へ送られるようになった。

4、徳川幕府が倒れると共に尾張藩の庇護がなくなった。

幕末頃、我が国に対し、開港を強く求めた諸外国と攘夷を方針としていた我が国との国交が非常に険悪となった時、開戦の場合を予想して、その軍事上・政治上の必要のため牧田川水系の川と朝妻湊にそそぐ天野川とを結ぶ運河計画がたてられたことがありました。

なお、太平洋戦争後にも牧田川と天野川を結ぶ運河計画が世間を騒がせたことがありました。

1、船附湊の跡

濃州三湊として栄えた船附・栗笠・烏江湊の跡は牧田川の改修工事によって昔の面影は全くなくなりました。

船附湊は牧田川と伊尾川の合流点に発達した良い湊で「濃州徇行記」に「この湊には浦高札があり、船稼をする者は八戸、湊問屋は安田七郎兵衛という。この湊は上り荷物を多く取扱い、名古屋の荷物は納屋町桑名屋伊右衛門より運送し、信州あたりの荷物は犬山問屋より運送した。」とあり、かなり活気に満ちていました。

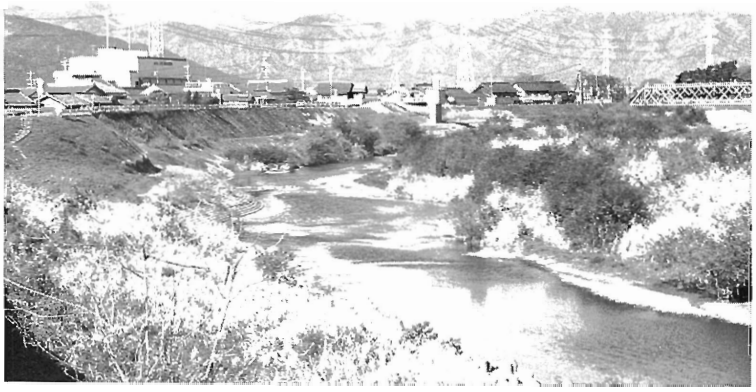
大垣と桑名を結ぶ桑名街道が通り、また、九里半街道の始点であったばかりでなく、伊勢参宮などの乗客も多かったようです。

2、栗笠湊の跡

牧田川と金草川の合流点附近にあって三湊のうち一番大きく、農・商を兼ねている者が多く「濃州徇行記」に「町長は東西三町（約三三〇㍍）酒屋・味噌屋・小物屋・紺屋・菓子屋其他小商する家余程みえたり。……湊問屋を佐藤次郎左衛門と云、御役艜六艘・鵜飼船四艘。御役船の外船二艘・四ツ乗一艘・藻取船八艘ありて、船かせぎをする家八戸ほどある由……」とありかなり大きな湊であって、岐阜からの荷物は、ここに多く着岸しました。

享保一七年（一七三二）から六斎市といって毎月六回市が開かれるようになってからは商業も盛んになりました。

3、烏江湊の跡



牧田川と杭瀬川が合流した所に位置した湊であります。

天正一七年（一五八九）豊臣秀吉が方広寺の大仏殿を建立した時、木曽の木材を烏江湊で陸揚げさせたといわれます。

「濃州徇行記」によれば「此村、民居牧田川のみづぎわにあり、北より南の方へ押回し堤上に民戸建ならべり、東向の村なり、こゝにては牧田川西より流来り、杭瀬川は北より高渕村と江月村の界を流れ来て此村の向にて落合へり。……此村は湊故、小商いをするものも入交り、又小百姓は駄賃かせぎをし渡世の助とせり、……」と記されています。

近鉄養老線の鉄橋の下流百㍍付近が湊の中心でありました。

4、船附の町並

船附は河湊としてばかりでなく、交通・経済・商業の中心地として栄えましたが、今日では昔のままの狭い町並の中にその昔をしのぶだけです。

湊は町並の北端にあって今も港の字名が残っています。

写真は町並の南端から湊のあった北方を眺めたものです。

旅人が持ち歩いた磁石

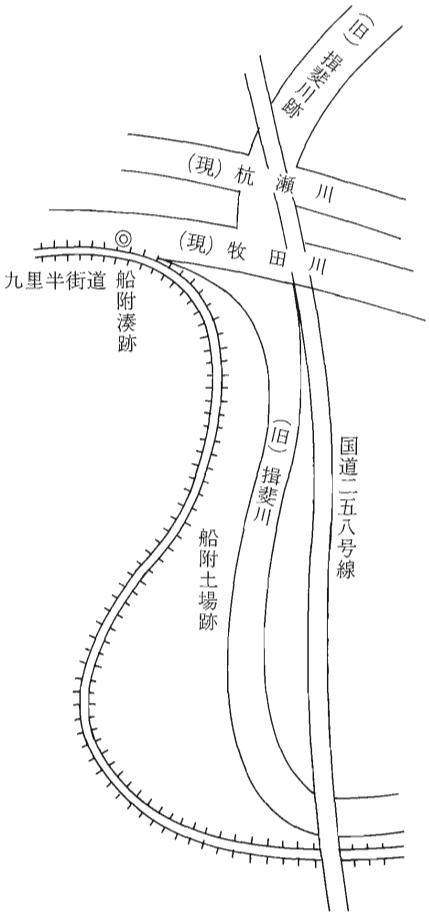
方角も定かでない初旅や道に迷った時、最もたよりになった磁石であります。

5、船附の土場跡

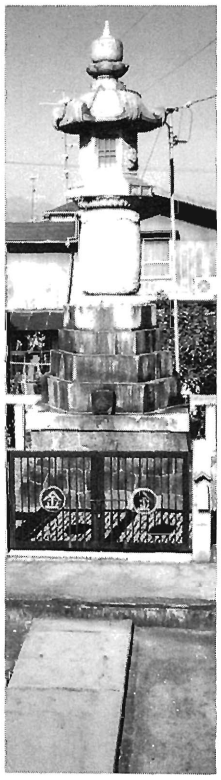
船附湊が明治維新の後、全く衰亡してから、もとの船頭さんや個人が使用していた船着場（土場）は揖斐川の改修工事によってその河道が変ったため、その河川敷は畑となってしまいました。

写真は国道二五八線から写したものです。

左図を参照して下さい。



6、船附湊跡にあった常夜灯



表面に「常夜燈」　裏面に「大正十四年（一九二五）」

標柱には「牧田川改修移転記念

昭和五十一年三月船附区」

㊟を刻した金刀比羅神社のりっぱな灯明です。

7、栗笠の堤防町通り

写真で見る一〇〇㍍程の間の堤通りは平田靭負が薩摩藩御手伝普請の際、宝暦四年（一七五四）三月閏二月九日朝、伊集院十蔵など三〇〇人ばかりと共に、この道を通って大牧の役館へおもむいたと、栗笠専了寺日記にあります。

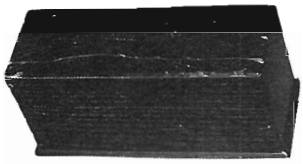
総奉行の心中如何ばかりであったでしょう。

8、栗笠　市神神社

栗笠では享保一七年（一七三二）から六斎市（さいいち）といって毎月六回きまった日に市場が開かれました。

市場の神様、大市姫神（おおいちひめ）をお祭りしてあります。

箱枕

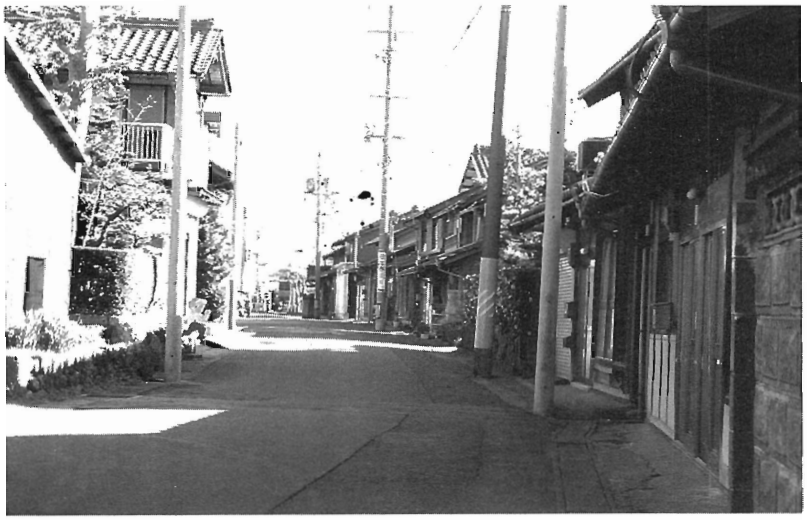


引出しがあって、小銭・書付けなどを入れました。

9、栗笠湊にあった灯明

この灯明は栗笠湊の堤上にあったのを牧田川改修の時、市神神社境内に移したもので、正面に「皇大神宮」。側面に「村中安全」、裏面に「天保八酉（一八三七）七月建立」、「明治三十一年（一八九八）改築」と記されています。

10、栗笠の町並



栗笠は河港とし繁栄したばかりでなく六斎市が開かれ、近くの村から人びとが集まっていろいろの品物が取引きされたため商業も盛んとなりました。

東西三丁（約三三〇メートル）の町筋は田舎には珍らしく町幅が広く、現在でも自動車の交通は便利で商業も盛んです。

写真は町の中程から東方を眺めたもので、東端に市神神社の神殿が見えます。町並の東端附近は船問屋佐藤家の本家の屋敷趾であります。栗笠湊の繁栄を支えてきた栄誉ある船頭さんもこの付近に住んでいました。今もその子孫七戸で市神神社境内にある皇大神宮灯明のお祭りをしています。

11、栗笠湊址標柱

栗笠湊の中心は、この場所から下流五〇㍍程の所にありました。養老町教育委員会が「昭和五十七年三月」に建てました。

正面に「栗笠湊址」。

両側面に「九里半街道、濃州三湊の解説」をしてあります。

12、栗笠福地神社の祭堤灯

船問屋の佐藤家は敬神の念強く、文化・文政の頃村人に獅子舞や祭踊りを奉納させましたが、更に高さ二・八二㍍、直径二・〇五㍍の大提灯四張、横三・六㍍、高さ一・七九㍍のきりこ一張、大紅提灯二張の外、境内及び村内に計一五〇張程の献灯をすることにしました。この伝統は二百年後の今日もなお守られています。

13、九里半街道の分岐点

濃州徇行記に「烏江湊より牧田へ至るには牧田川の堤上を高田町のうらへかかり、夫より五日市場、沢田村、乙坂を経て牧田に至る、又船附・栗笠湊よりは金草川の南堤をゆき西岩道、ロヶ島村を通り高田町へ出る也。」とあります。

九里半街道は栗笠福地神社の裏で二つに分かれ、一つは牧田川右岸堤を通って高田で一本になって五日市へ通じていました。

写真、右手の坂を下ると作造橋を渡り、烏江の町並を抜けて牧田川堤へ出ます。左手の道は金草川堤で三〇㍍程進むと右手に金草川が展開します。

14、烏江の町並

貝原益軒の「木蘇路の記」に「牧田の東に高田と云う所あり、其東に唐末（烏江）という所あり、是大垣の南也、唐末より河船に乗り桑名へも宮（熱田）へも行く也、京都の商人などは荷物を江戸へくだすにおおくは此道をつかわすという。今洲（今須）より唐末まで六里あり。」と記しています。

この今須から牧田・烏江・桑名への通路が関東、関西を連ねる商人荷物の要路に当っていた事がわかるとともに朝妻湊も重要な湖港であったことがわかります。

写真は町並の北端から南方を眺めたもので入口右手に皇大神宮の灯明があり、「明治三十九丙午年（一九〇六）、下組」の建立であります。町並はせまく、昔の面影もありませんが僅か百㍍程ながら残された九里半街道の一部であります。

15、九里半街道の道標

九里半街道の道標としては唯一つのものであります。

正面に「九里半街道　上之郷へ六丁　下笠へ　十貳丁」

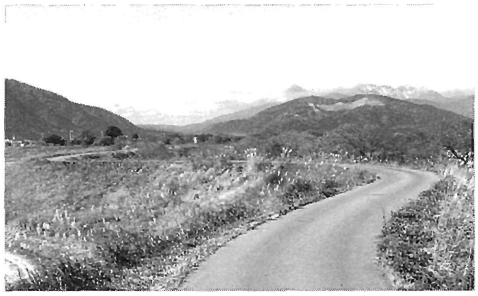
裏面に「御即位御大典記念事業　大正四年十一月（一九一五）」

と刻されています。高さは約二㍍あります。

16、岩道の土場跡

金草川は牧田川の支流で栗笠の附近で合流していたので、濃州三湊と高田町とを結ぶ舟路として利用され、九里半街道沿いに岩道・西岩道・口ヶ島・下高田の四か所に土場があって、荷物の揚げ降しが行われ、三湊が衰亡した後も利用されていました。

17、金草川右岸堤の九里半街道



写真は岩道付近の堤坊上から西方を眺たもので、右手は金草川です。

この街道は、ほとんど昔のままの姿を残しています。不自然に屈曲している部分はたいてい洪水による切所で堤下には多くの*押堀（おっぽり）が残っていましたが、今は二、三か所を残して埋立てられました。

「押堀や真菰（まこも）のかげに鮒群れて」

18、西岩道の土堤跡

九里半街道の右手、柳・葦などの生い茂っているのが金草川。

大正の初め頃、この土場からりっぱなお嫁入り道具がめでたく陸揚げされたそうです。

広幡大橋の南詰の東方、堤防がカーブする所の内法一面にく・り・石（一〇～一五センチメートル）が敷きつめられています。昔の人の涙ぐましい水防の努力の跡です。

19、ロヶ島の土場跡

ロヶ島村の東端附近に土場がありましたが、今では一面の草原で昔の面影は全くありません。手前堤防は九里半街道であります。

名古屋の河内屋という店から、栗笠湊の船問屋佐藤次郎左衛門の船でロヶ島の長誓寺へ

黒塗腰障子（くろぬりこしょうじ）　四本

しっぽく台（食卓）一台

を送ったという送り状があります。

20、九里半街道が金草川右岸から左岸へ渡った場所

九里半街道はロヶ島村の西方で、左岸の下高田へ渡り、西へ進んで高田町へ入りました。

写真、堤防の中央部附近が土場跡で、昭和の初期頃までは、米などを積んだ船が出入しました。

21、下高田の九里半街道桜並木

下高田の土場跡付近から西方を眺めると桜並木が今も続き昔の姿が残っています。

左手に見える金草川もこの付近ではかなり広くなっています。

22、下高田の金刀毘羅社神灯台

正面に「金刀毘羅社神燈臺」

裏面に「明治十年（一八七七）十月」

下高田は舟運の関係で金刀毘羅信仰が深かったのでしょう。

23、高田下河原の大神宮常夜灯

下高田から高田町へ入る九里半街道の傍に残る常夜灯で

東面「大神宮」

南面「常夜燈」

西面「嘉永六年（一八五三）　癸丑　初夏」と刻まれています。又、台石の西面に「下河原中」、東・南・北面に「寄進者」の名が刻まれています。

24、高田下河原の並木跡

九里半街道畔の並木の名残りでしょうか。

道中合羽と笠

25、金草川右岸堤から高田町への入口付近

九里半街道は幕末頃から下高田道を通る人が少くなり、金草川右岸堤を通って、養老中央病院付近から高田町へ入る交通が多くなりました。

写真はその入口付近で、コンクリート橋の下を流れるのは金草川の一分派です。

26、牧田川右岸堤から高田町の北を通った九里半街道

写真前方は鎌倉・室町時代に刀工直江志津と称えられた集団が居た直江本郷（南直江）です。

街道は左へ折れて美津濃工場東側を通って正面へ出、西へ向って五日市へ進みます。

ミズノ工場や高田中学校の敷地は旧牧田川の河川敷地で堤防も高く大きかったが今は低く削られました。

27、高田の町並み

高田町は江戸時代初期から交通・商業・経済・文化の中心地として栄えました。

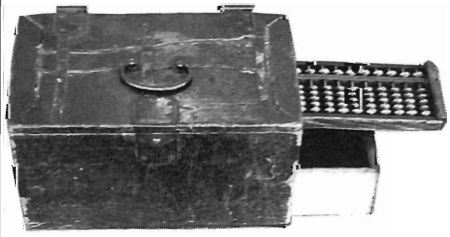
濃州三湊と牧田宿との中継点、又、養老街道と九里半街道との交差点でした。

金草川左岸堤下高田を経て高田町へ入った九里半街道は、今日もなお中央商店街として栄えています。

算盤（そろばん）の付いた硯箱

宿屋や商人は、大きな、りっぱな硯（すずり）箱を張場に備えていました。

この硯箱には、算盤が入っていたり、引出しも付いていて書付けなども入れました。



28、五日市の町並

古くから五日市場といわれ、毎月五の日に市場が開かれていました。

市場が開かれた場所、取扱われた品物などくわしいことはわかりませんが、市場町としてたいへん栄えた所です。

五日市は、濃州三湊と牧田宿との中間にあって、九里半街道を通じて宿継ぎとなっていました。

写真、村の中を東西に通ずる道は、九里半街道ですが、昔の繁栄の姿はありません。

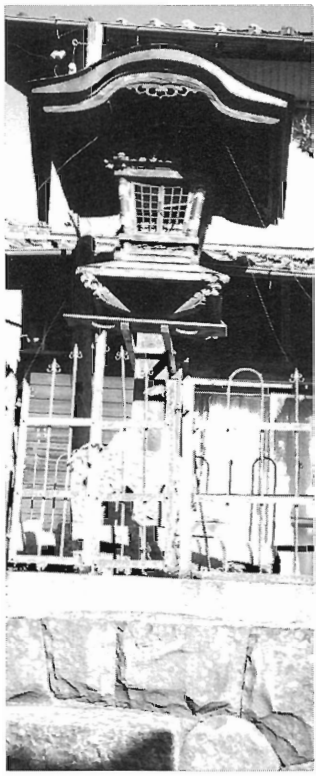
29、沢田の町並

沢田は、南北朝時代からその名のみえる由緒ある村で、式内社久々美雄彦神社があります。

村内を九里半街道・伊勢街道・牧田街道・多良街道・津島街道が通じ、交通・運輸・経済上の要地でした。

昔栄えた面影が随所に残る美しい町並が東西に長く続いています。

30、沢田の常夜灯



正面に「常夜燈」
裏面に「文化十四年（一八一七）丁丑六月中院　始建
昭和三十一年（一九五六）丙申八月改建」

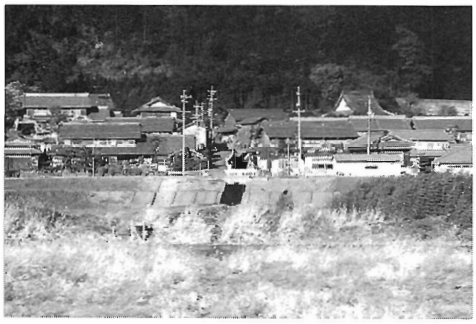
31、沢田から乙坂への曲がり角

九里半街道は、沢田の町並の中途から折れて、牧田川を渡り、乙坂へ入っていきます。
写真、前方の山麓の集落は乙坂村です。

32、九里半街道を沢田から乙坂へ結んだ橋の遺構

九里半街道が沢田から牧田川を渡って乙坂へ通じた場所に架かっていた橋の遺構です。
荒れ果てた河原の中に、行き交う人もなく、九里半街道三百年の盛衰を物語っています。
手前は乙坂側の堤防、向側の山麓は沢田です。

33、乙坂の九里半街道



写真、手前は牧田川で、沢田と乙坂の間を結んでいた橋の橋脚が残っています。
写真の中央を前方山麓に向かって、まっすぐに通ずるのが九里半街道です。

34、乙坂の山麓に残る九里半街道

乙坂地内に入った九里半街道はしばらくして左折し、さらに進むと、右折して山麓に入ります。ここから約二百メートル程の間、境谷に行き着くまでは、草生い茂り、畑作りの人の外は行交う人もありませんが、数百年の昔は合羽姿の旅人、商人、荷物を背負った人夫、駄馬などの往来のはげしかった九里半街道の一部です。

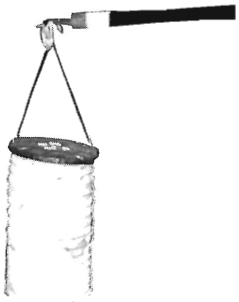
境谷から先は、名神高速道路の敷地となってしまって、山村の集落に入る手前までは、すっかりその姿を消してしまいました。

35、山村地内の九里半街道

写真は山村の西端であって、中央、右手から出て来た九里半街道は左折して手前へ進み神社前で右折して牧田へ進み、急坂烏頭坂を越えて関ヶ原で中山道に合しました。

小田原提灯

使わない時は折たたんで腰にさし、使う時には伸ばして拡げられるようにした細長い提灯で、旅行にはたいへん便利でありました。



早道（ちぎりともいいます）

巾着や銭入れを早道ともいいますが、写真の早道は上の円筒の部分に持薬、下の袋には小銭を入れて、腰に付けていました。

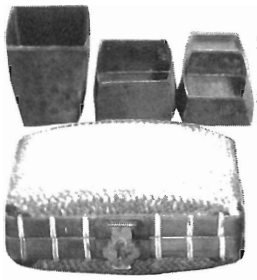
薬籠

もぐさや持薬などを入れ、腰につけていました。

矢立

墨つぼに筆を入れる筒のついたもので帯に差したりして持ち歩きました。

割籠



弁当を入れて旅をしたもので、中には飯を入れる器、おかずを入れる器が入っています。

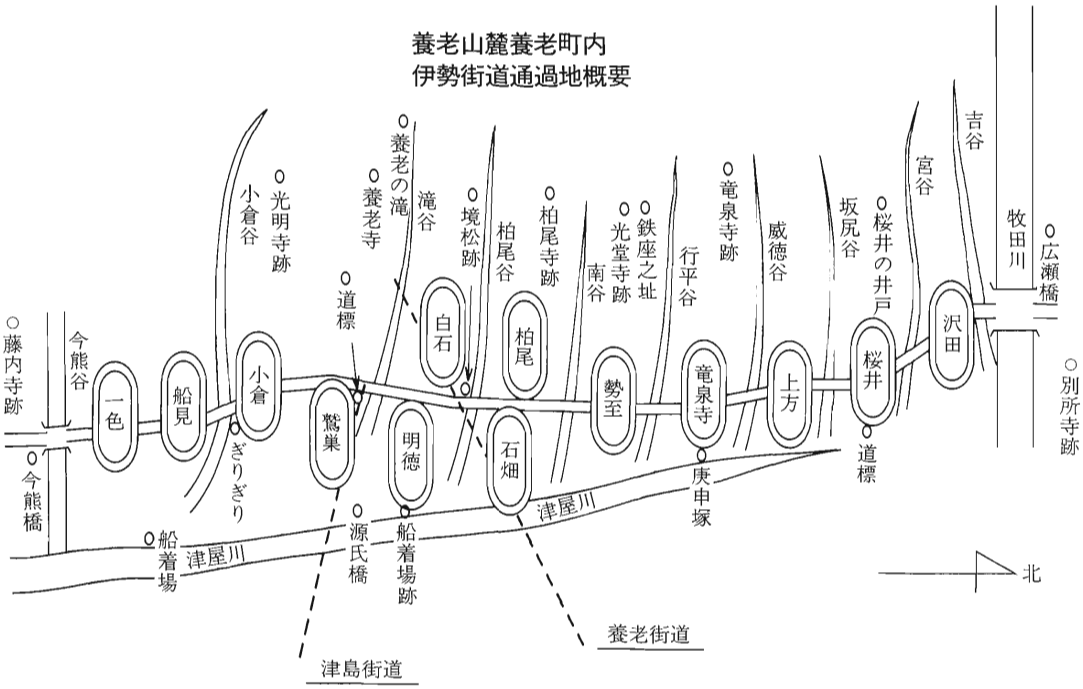
茶屋看板

旅人にお茶や菓子を出し、一休みさせた店の看板です。

（注）「旅人の持ち歩いた磁石」の外、旅行用具等は、日比信吉（養老町押越）氏所蔵のものであります。

◎担当委員　田中育次、渋谷保之、中村泰治、西脇健治郎

伊勢街道



伊勢街道の概要

古代の美濃の国は三野*と書かれました。特に広沃地に恵まれ、東国への進出の基地としての重要性からも、大和朝廷と密接な関係にありました。

伊勢街道は、大和と北陸、北近江、美濃国府、伊勢に通ずる最短距離として、東山道関ヶ原から牧田川を渡って、養老山脈の東側を標高約五〇メートル前後の傾斜地帯を、沢田、桜井、上方（うわがた）、竜泉寺、勢至、柏尾（かしわお）、白石、鷲巣、小倉、船見、一色から、今熊谷を渡る約九・五キロメートルの間を通って、南濃町から桑名に到っています。

揖斐川に通ずる津屋川の舟運と併せて、この南北の街道は、古代社会においては、重要な道路として巾広く用いられました。

日本武尊の東征にかかる「桜井の井戸」、多芸野の伝説、大海人皇子の壬申の乱（六七二）、元正天皇の霊亀三年（七一七）と翌年の再度の養老行幸、聖武天皇の天平一二年（七四〇）の養老行幸など草深い美濃の路は特に重要な役目を果たしていたと思われます。

また平治の乱（一一五九）に敗走した源義朝の津屋川利用のゆかりの源氏橋、明徳四年（一三九三）足利将軍左大臣足利義満の養老観瀑の明徳（みょうとく）の船着場跡、船見の船着場跡など、

水量の多い津屋川の利用が、街道に併用されて後世まで利用されたことがよくわかります。

また街道は養老山脈の何本かの谷は出水のたびに流失したり、修理され道筋は変わっていきました。

養老町吉谷右岸伊勢街道入口

〔伊勢街道と、多芸一向一揆〕　天文六年（一五三七）

浅井亮政が美濃へ兵を入れ土岐頼芸と戦いました。その時現在の小倉の福勝寺を中心とする門徒が、在地小領主の高木氏と結んで浅井氏に応戦しました。

土岐氏は高木氏を討ち、在家七〇〇軒余を焼き払いました。

本願寺が仲に入って和睦が成立しましたが、その後も土岐氏の支配に強く反対し、何時でも沙汰次第により兵を出す姿勢を崩しませんでした。

〔伊勢街道と、養老山麓の百姓一揆〕　明治二年（一八六九）

飯ノ木村やその附近の農民二〇〇人余が、毎年続く不作のため積もった地主への年貢米や借金を帳消しにしてしまおうと共謀し、現在の松栄町に集合し、高田町の豪商・酒屋・資産家などを襲って貸借関係を不明にしてしまいました。暴動は大垣藩の鎮台兵などに鎮圧され、暴徒は押越村八幡神社に引揚げ解散し、主謀者は捕らえられ罰せられました。

〔伊勢街道と　伊勢騒動〕　明治九年（一八七六）

明治政府の地租改正条例に小作人は地租の軽減を要求して三重県に始まった暴徒は、伊勢街道を北上し、道々地元の農民を加えながらその参加者は約一〇〇〇人に増えていき現在の海津郡、養老郡、安八郡など四郡五十一か村に及びました。養老町でも船見、横屋、大巻などへ侵入し村々の資産家や学校に放火するなど、大規模の暴動となり、警官や鎮台兵の力によって漸く鎮圧されました。

この暴動の後、地租の税率は三パーセントから、二・五パ

ーセントに引き下げられました。

〔伊勢講・抜け参り〕

伊勢神宮に参詣したいという庶民の願いから考えだされた組織的な「講」という仕組みで、一定の仲間が継続的に掛け金を積立て、それを仲間の代表が順次伊勢参りをする時の費用に充てるのです。

この起源は南北朝時代に始まるのですが、江戸時代の末期になるほど盛大になりました。

「伊勢へ行きたい、伊勢路が見たい、せめて一生に一度でも」という伊勢音頭に、庶民の願望が歌い込まれています。

文政十三年（一八三〇）の半年間の伊勢参宮者が四六〇万人もあったという記録も残っています。

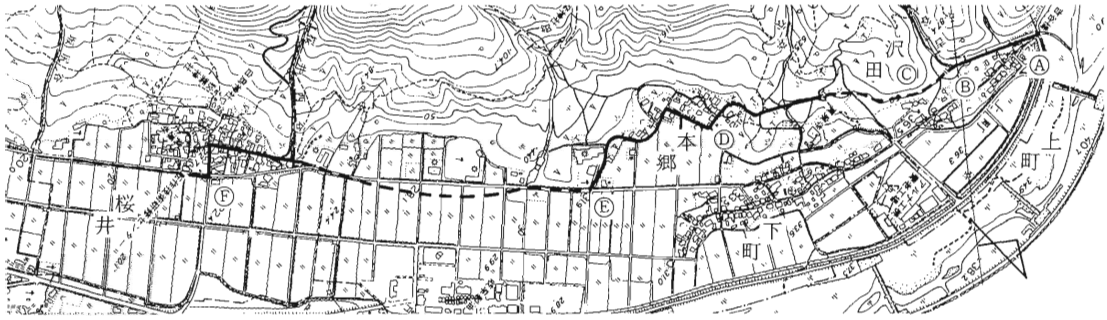
往時は自由に旅をすることは許されていなかった時代でも、伊勢参りだけは、途中や伊勢での宿泊は、各伊勢講の定宿が決まっていました。道中は、「旅の恥は・・・」という観光や行楽の開放感にひたる楽しみもあったようです。

江戸時代、家人に無断で伊勢参りをすることを「抜け参り」と言いましたが、これは大目に見る習慣もありました。

（学研社現代百科事典〈Ⅰ〉）

1、日本武尊の桜井の井戸など

牧田川から、養老町沢田の吉谷右岸(A)より、伊勢街道となります。吉谷をさかのぼると旧屋敷跡の石垣(B)に行き当ります。街道は左へ折れる辺り一帯は、杉、雑木林に覆われ、けもの道となったり、駐車場に造成されて街道の面影(C)はなく、竹林や雑木に覆われた道を南進し、墓地を通って沢田本郷の集落の灯明の辻(D)に出ます。街道は右折して集落を出ると、開墾されて田となって、街道はなく(E)、旧沢田小学校の中央辺りを、街道が通っていました。学校跡地のすぐ前の桜井西谷を渡って桜井集落のほぼ中央を南北に通り、中ほどの辻(F)には道標と、灯明があります。



沢田、桜井付近

道標は自然石で「左せきかはら道」「右やうらう道」裏に「弘化三年（一八四六）丙午年」とあります。

この辻の西方山ずそに、白鳥神社があります。祭神は日本武尊で、境内には尊ゆかりの「桜井の井戸」（町史跡）があり、尊が伊吹山の賊を平定されて南下のとき、この井戸で休憩されたところです。また境内には「ケヤキ」（町天然記念物）もあります。

桜井の道標

道標から南進して、桜井集落を出、上方（うわがた）地区への街道は田園続きで、街道の原形は、なくなっています。

上方集落の中央山ぞいに、白鳥神社があり、祭神は桜井の白鳥神社と同じく日本武尊です。上方の白鳥神社には、神宿の制度があります。これは、昔何者かが拝殿の「わにぐち」*を持ち出し、他方へ行こうとすると行けなくなって、同じ元の場所へ返したことから、村中一年ずつ交替で、この「わにぐち」を家庭でお守りをしています。神社の境内には「カヤの木、イチョウの木」（町天然記念物）があります。

上方地区の街道の名残りとしては、旧街道の辻にあったという自然石が、集落南部の街道の辻に移転されています。

上方集落の南部の住宅地を通った街道は、威徳谷へ出ますが、護岸工事のあと雑木に覆われて、渡るに困難です。

2、庚申塔（こうしんとう）・六社神社

威徳谷を越えて竜泉寺集落へ入ります。すぐ西側に町内でも古い庚申塔があります。昔村人は庚申の日にお供物をして、村内の安全を祈ったようです。

この辺りは右手に畑、雑木で、左側は田園で街道の名残りを留める唯一のところと思われます。

庚申塔

近く六社神社の辻に出ます。境内には「ムクの木」（県天然記念物）があります。辻の西方山中に、多芸七坊の一の大威徳山竜泉寺跡（町史跡）があります。

六社神社の辻を南進すると、西側に住宅があり、更に南進すると、雑木林や畑などを経て、行平谷（ゆきひらだに）へ出ます。

竜泉寺地内の街道

3、勢至千軒・鉄座址

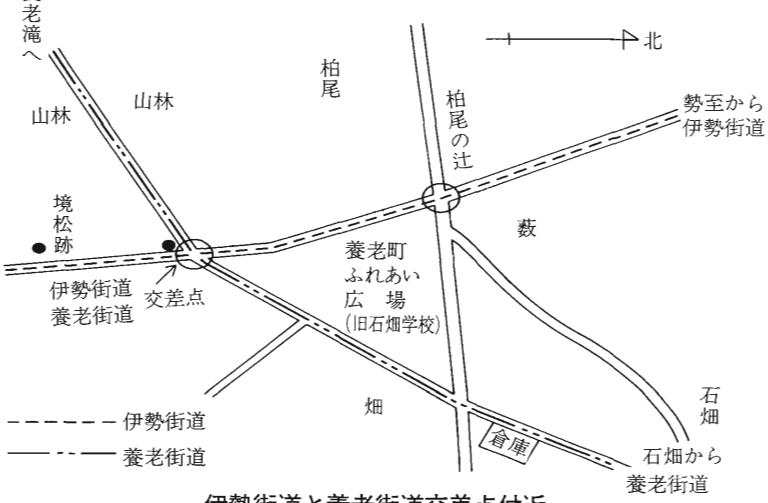
行平谷を越えると、雑木林や杉の木立ちの間を通って、勢至集落へ入ります。

今は住家が三〇軒位ですが、かつては勢至千軒・寺三ヶ寺といわれたところで、集落の中ほどに鉄座址の標柱の辻に出ます。この辻から西方の山中に多芸七坊の一の勢至山光堂寺跡(町史跡)があります。

勢至の鉄座址

勢至は製鉄には、特に良質の水があったのと、重量物の運搬に舟運の便が良かったことから、鉄座制を中心に繁栄したところです。織田信長や豊臣秀吉の天下統一に、武器の製産に大きな役割を果しました。津屋川の水運がおとろえると、勢至もだんだん衰微していきました。今も鍛冶屋町、町屋の地名が残っており、当時商工の町の繁栄が偲ばれます。

勢至の辻から南進して、南谷を越えると、薮や雑木林、畑などの間を通って、柏尾の集落の辻へ出ます。



伊勢街道と養老街道交差点付近

4、多芸野（たぎの）

道標　伊勢街道、津島街道、養老公園の交差点

勢至から京ケ脇辺り一帯を「多芸野」といいます。

古事記は「ミコト当芸野に到ります時に『吾が心恒は虚（そら）より翔（かけ）り行かむと念いつるを今吾が足得歩まずたぎたぎしくなりぬ』と詔（の）り給ひき故（かれ）其地（そこ）を名づけて当芸（たぎ）という」と記しています。

柏尾の集落の辻は、石畑から柏尾へ通ずる道と、街道が交差するところで、辻の西方に多芸七坊の一の柏尾山柏尾寺跡（県史跡）や、明治中期に付近から発掘された千体仏群があります。

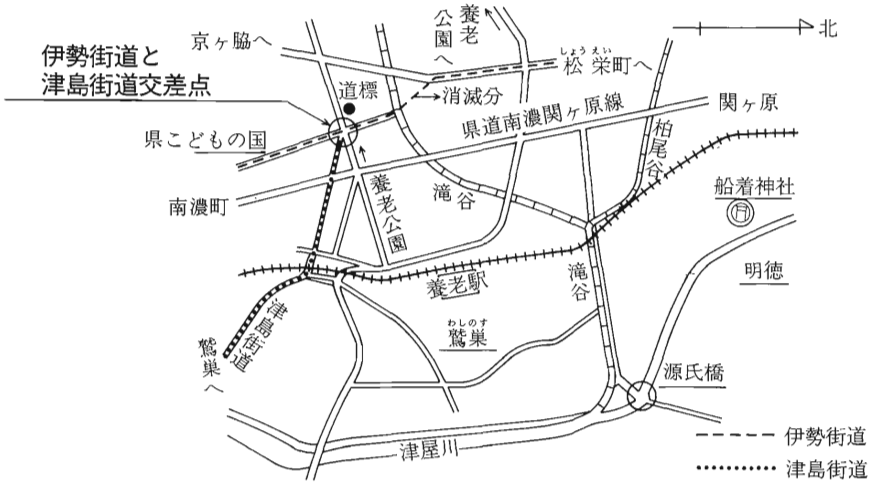
辻の近くには、旧石畑小学校跡があります。今は町の「ふれあい広場」となっています。

この辻を南進すると、北東から南西に通ずる養老街道と交差します。辻の南西かどに「旧いせ道」と彫った自然石の道標がありましたが、今はゆくえがわからなくなっています。

5、養老

松栄町を南進すると、県道養老公園線と交差します。

この辻の西南に養老公園があります。名瀑養老の滝、養老神社（出土品・県重文）、菊水泉、多芸七坊の一で唯一の法灯を嗣ぐ養老寺（国、県、町重文多数）、元正天皇行幸遺跡（県史跡）、妙見堂（本尊・県重文）



津島街道と伊勢街道交差点付近

のほか、公園内には有名人の漢詩和歌、俳句などの碑が多く建てられており、観光に、保健等四季を通じて来訪者が絶えません。

元正天皇が霊亀三年（七一七）当耆郡行幸の経路は、不破行宮から街道を往復され、翌年二回目は伊勢から行幸されて伊勢へ、また聖武天皇が天平一二年（七四〇）の養老行幸は、伊勢から養老経由不破行宮へと、伊勢街道は、歴史的な往来がありました。

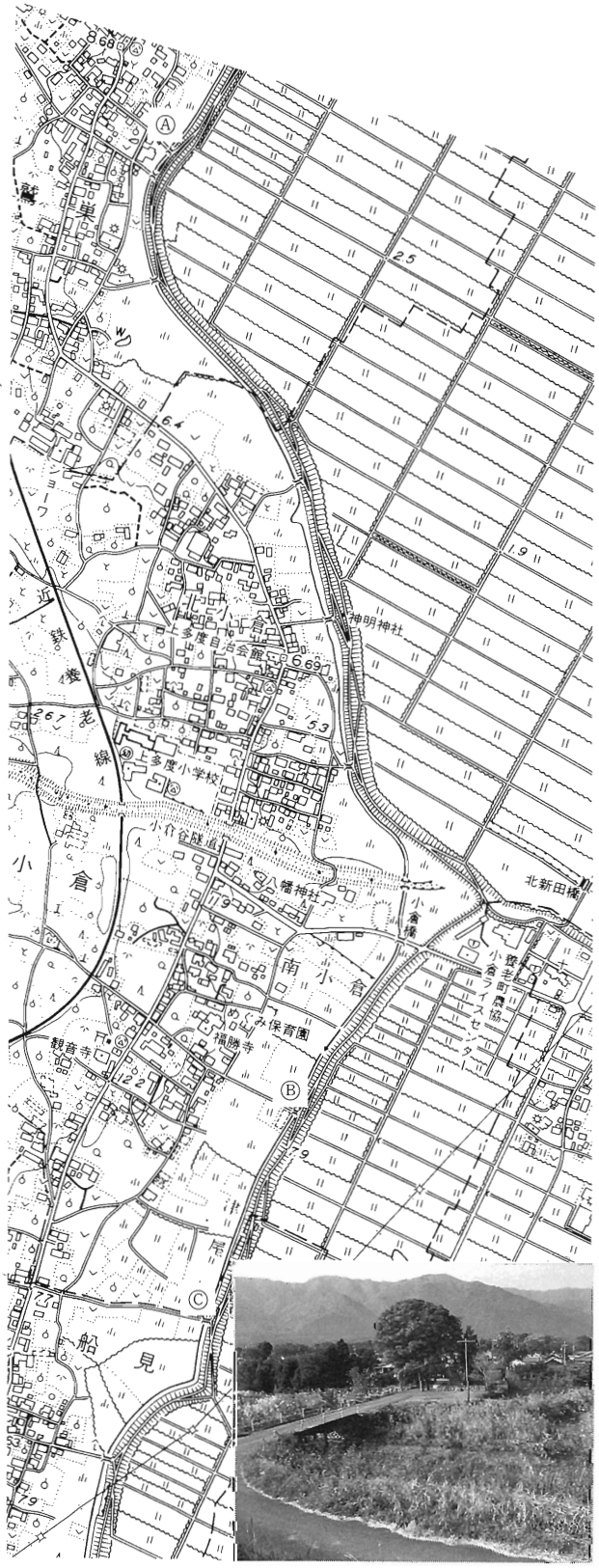
〔津屋川の舟運〕

津屋川は養老山脈の東側を山添いに、北から南へ流れ、大小何本かの谷の水を集めて、牧田川、揖斐川へ合流しており、織田、豊臣時代までは竜泉寺、勢至辺りまで川巾も広く、水量も多く、相当大きい船が通っていたようです。

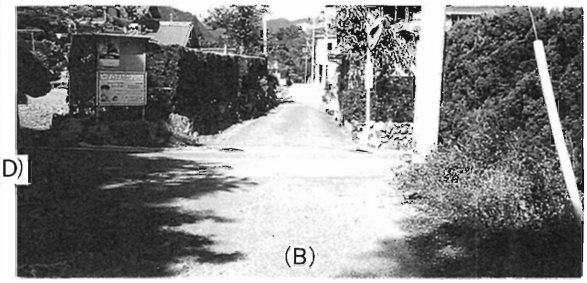
天平年間に建立の多芸七坊の建設資材や、勢至の鉄座による材料などの運搬、人員の輸送に伴なう舟運が役立ちました。

鷲巣集落の東側を流れる津屋川は、平治の乱（一一五九）に破れた源義朝が柴舟で内海に逃れた源氏橋（町史跡）、明徳四年（一三九三）左大臣足利義満が養老観瀑に舟で訪れた船着場跡（町史跡）も、源氏橋の近くにあります。

津屋川下流の鷲巣Ⓐ、小倉Ⓑ、一色Ⓒには、船着場跡（土場ともいわれる）広場があり、灯明が残っています。



②からかさ松跡の標識



①柏尾から松栄町への道

6、柏尾から、松栄町へ

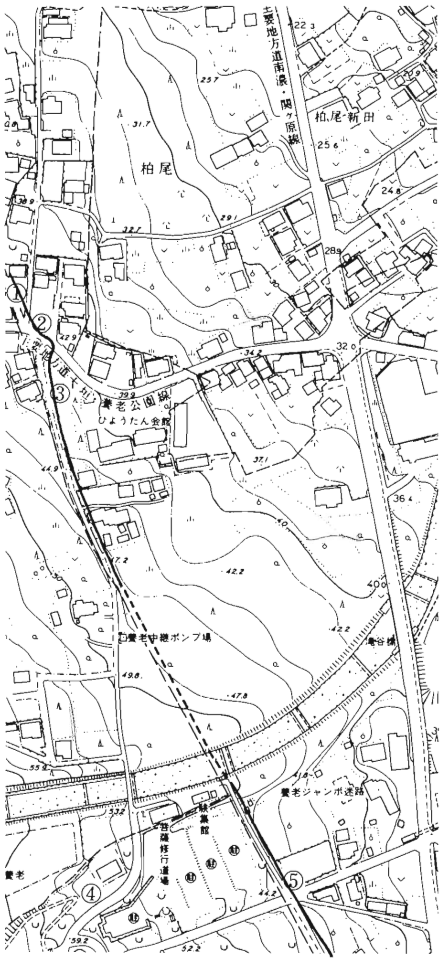
養老地区をほぼ南進してきた街道は、柏尾地内(A)から、上多度地内の松栄町の団地(B)へと進んできます。（写真①）

写真①の北から南への道の中ほどを、東(C)から西(D)への道は、白石から養老の滝への道です。

7、白石、柏尾、鷲巣との境に立つ、からかさ松跡

旧三ヶ村の接点に目印として親しまれた「からかさ松」は枯死し、その跡に、それを示す標識が建てられています。（地図Ⓒ写真②）

この団地一帯は戦前は競馬場に、戦時中は食糧増産の農場に、戦後は今の住宅団地へと、時代の姿を変えてきました。



8、松栄町のメイン・ストリートの西を行く街道

からかさ松跡から団地への道(B)をそれて、西を南進する草深いひっそりとした道(A)に、街道の面影を残しています。（写真③）

9、松栄町を抜け（地図中①）県道大垣養老公園線を渡って（地図中②）町道京ヶ脇線（地図中③④）を、子どもの国（地図中⑤）へ

広い県道から狭い町道は、途中から今は消滅している道を、滝谷を渡って子どもの国の南北隅へ達します。

③松栄町の西を行く街道

10、津島街道の交点から、西小倉鎌倉台団地付近へ

子どもの国の東隅は、ここを起点として南進する津島街道とが交わる地点でもあります。（地図中①、写真①）

伊勢街道は写真Ⓓの(A)から(B)へ南進し、津島街道は(C)から東南の方向(D)へ通じています。

(D)

(A)

(B)

(C)　①伊勢街道と津島街道との交点

(写真②)

子どもの国の東端に沿って（地図中①から②へ）南進します。

やがて、街道は、主要地方道南濃、関ヶ原線の信号のある交差点（地図中②、写真②）のある地点に達します。

写真②の地点から、南東の方向を南関線越しに望むと、この延長上街道（地図中③から④）は、宅地や畑や茶園に利用されて、西小倉の住宅団地、鎌倉台までの間は消滅してありません。

11、西小倉団地より小倉谷へ

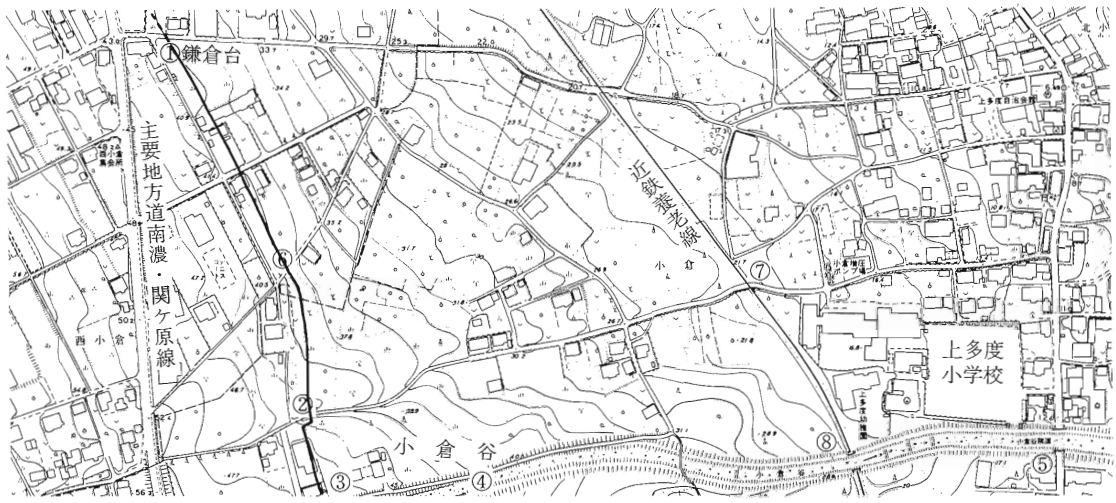
西小倉の住宅団地鎌倉台は、西を東西に主要地方道南濃、関ヶ原線の東にあります。（地図①）

茶園などによって消滅した街道は、ここから再びその姿を現わし、養老山系からの小倉谷が、赤岩神社の南、上多度小学校の南、天井川*になっている小倉堅道を経て、津屋川に注ぐ小倉谷の方向へ南進しています。（地図③④⑤）

鎌倉台団地から南進して小倉との境に、多芸七坊の一の小倉山光明寺の伝説を示す「ぎりぎり」の木柱があります。（地図⑥）

さらに南進する道は、上多度小学校の北を西進する道と交わります。（地図⑦写真②）

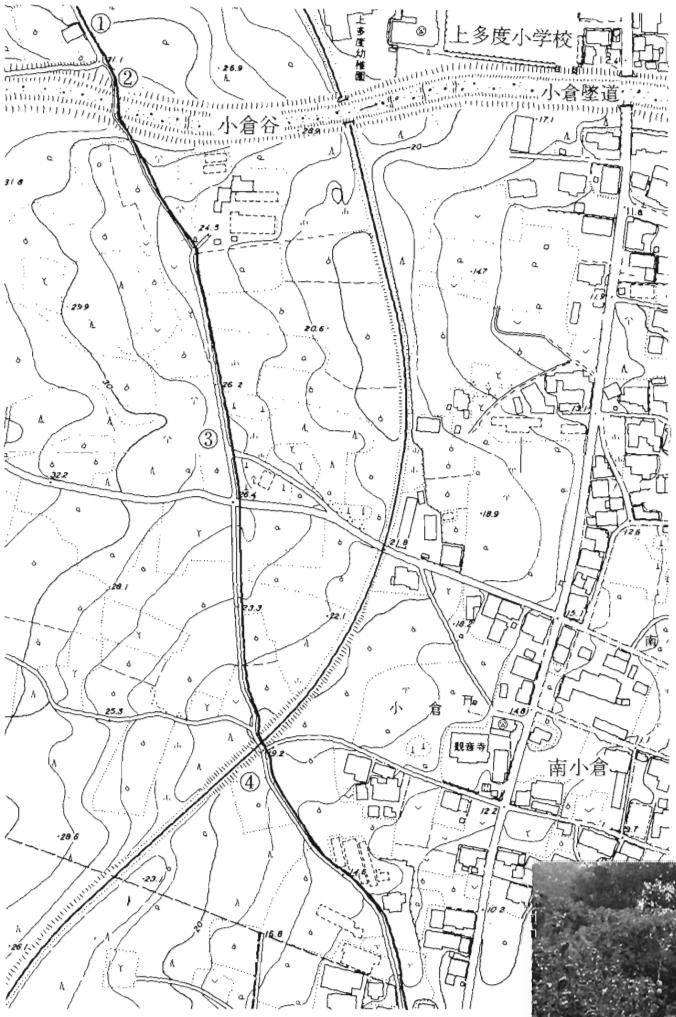
この交差する道は、西小倉方面へ西進する道と、小倉谷方面へ南進する道との交差する地点です。



写真②交差する道

写真①鎌倉台から小倉谷へ

写真③小倉谷を渡る地点



小倉谷への道
（写真①）へ

前頁の前記の交差点を西進すると、小倉谷への道を進み、小倉谷を越えて（地図②③④）と南進します。

渡河地点は人が通れるようになっています。

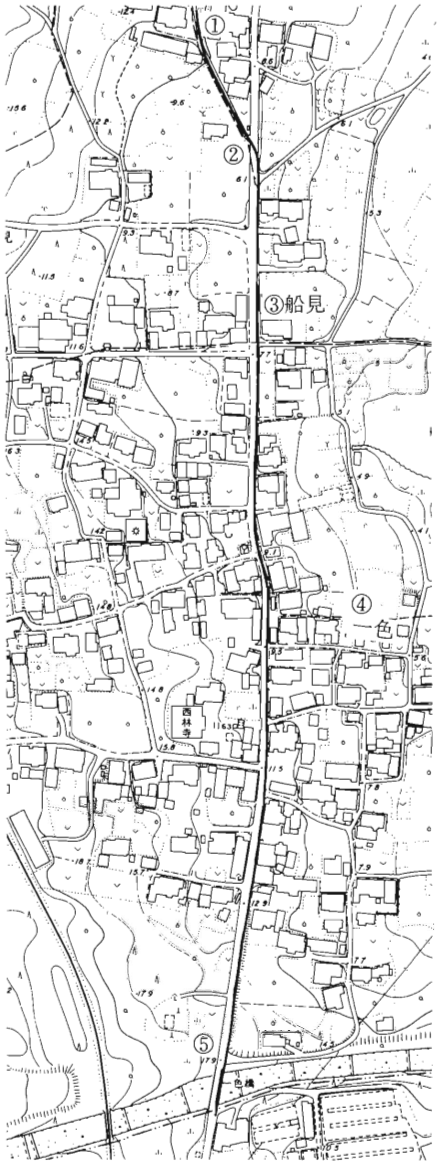
近鉄養老線と交わる
南小倉のガード下
（写真②）

（地図④）

次ページ地図②県道との合流地点（写真③）

小倉谷を渡ると道は平坦な畑の中の小道が、やがて近鉄養老線と交わるガード下をくぐります。（写真②地図④）

人家のまばらな道を進むと、船見で県道桑名線へ吸収されます。（写真④③前頁地図②）



ここからは県道桑名線を南進しますと、一色を経て、養老町内の終点今熊谷にかかる一色橋に達します。（地図⑤、写真①）

一色の津屋川沿いに、かつての舟運を使用された船着場の跡があり、広場（土場）と、大神宮常夜燈があります。（地図④）

伊勢街道は南濃町の津屋、志津、上野河戸、安江を経て、旧伊勢国へ通じます。

12、船見で県道桑名線合流点

小倉谷を渡って南小倉地内に入ると、人家もまばらな畑の中の寂しい平坦な道はやがて船見地内に行き着きます。

船見地内で、静寂さを破って交通量の多い県道桑名線と交わり、合流吸収されます。（地図②、前頁写真③）

〔異説　伊勢街道〕

小倉谷を渡り、若宮の東の雑木林を経て、やがて等の原に至る道がありましたという説もあります。等の原は戦前までは数戸の人家がありましたが、今は衰微し人家も皆無となり、当時を知るすべもありません。

◎担当委員　田中憲策・安田　高

写真①　今熊谷にかかる一色橋

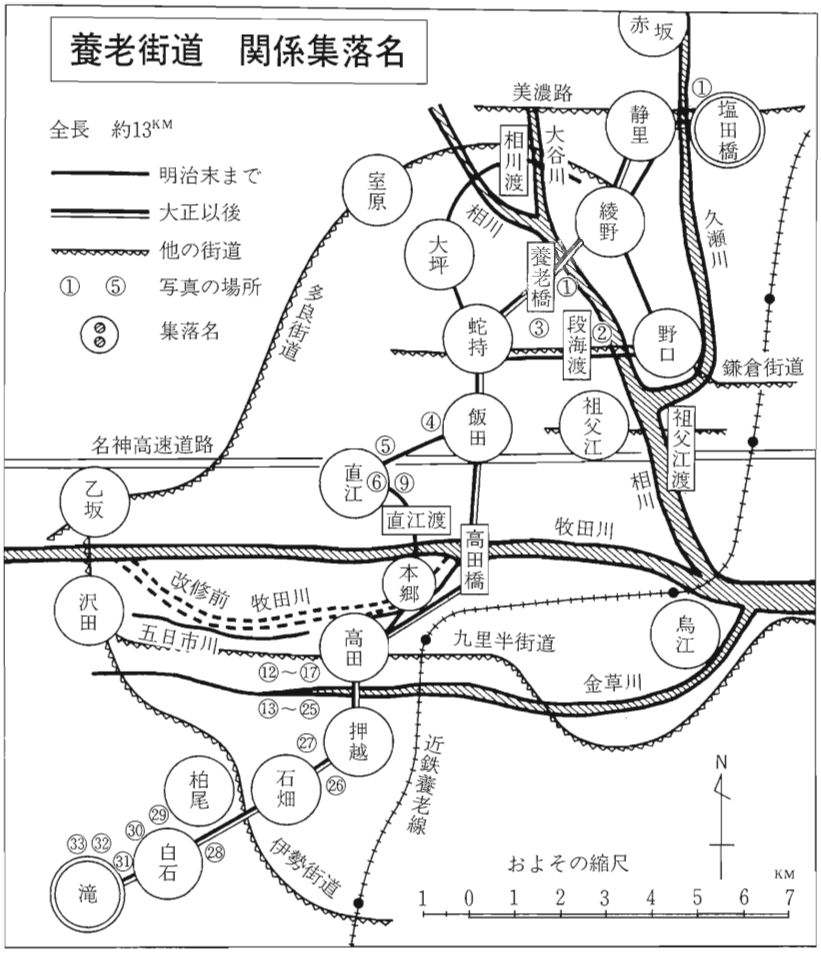
養老街道

養老街道の概要

養老街道は明治初期頃迄は、大垣塩田橋を起点に綾野から南に向い野口に達し、西進し段海渡しを越へ、養老町字段海に入り、蛇持にと進み、南進し飯田に向い小畑川を渡り、直江に入り、直江北渡しを経て、直江本郷に、それから南渡しを経て、高田北浦通りに出て、高田本通りで九里半街道と接し西進し二〇〇㍍位進んだ処から、南に直進し金草川を渡り、押越八幡神社の横を通り、石畑の袖取りの宮、淨誓寺の裏を過ぎ柏尾の部落の南を通り白石に至り、養老の滝に達していました。その後明治十三年に養老公園が開設されて、公園道として、文化人をはじめ、四季おりおりの景観を愛でる多くの観光客が増えて、この道も発展してまいりました。又その後、綾野から多良街道を通り綾野の渡しを越して、室原の除道に入り、大坪を過ぎ、角田を通り飯田で本街道と合する道も利用されていました。大坪には人力宿もあり、明治四十三年四月大正天皇が皇太子の時に、この道を通られ、大坪で水を使われました、高田小学校で少憩の後、公園に向かわれました。

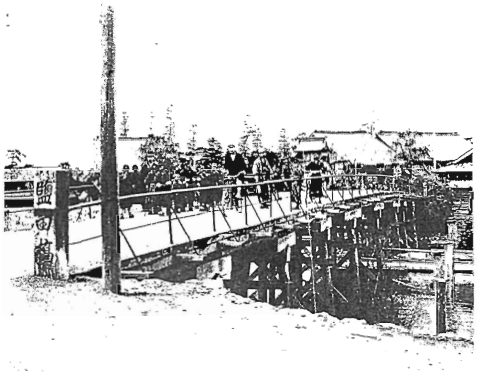
大正二年養老橋が、新道に架せられてからは、公園道もどんどん利用され、自転車等で通行した人がふえました。その間鉄道が通じる迄は、文化人も人力車や、バス等で公園を訪れ、清遊した事でしょう。

この街道は相川・牧田川の渡しや板橋に左右され、その労苦もいとわず、養老の滝を愛でる人には思い出深い道であり、その途中の高田の街も滝帰りの行楽客で賑わった事だと思われます。



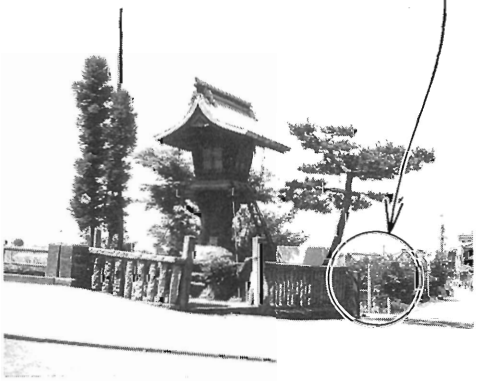
1、養老街道起点　塩田橋

養老街道は大垣と養老の滝を結ぶ古道であります。起点は美濃路との分岐点、現大垣市の塩田橋で、静里村塩田から、綾野村、野口村を経て、更に西へ約五〇〇㍍進むと相川の渡船場「段海渡」です。町外に起点がありますが少し説明をします。まず塩田の橋です。現在橋の標柱として残っているものは木製と鉄の欄干との接続に鉄板が使われたため、くびれがあり、その跡がはっきりと残されています。文化年間の古絵図には西久瀬川土橋と記されており、塩田橋と改名されたのは明治になってからと聞いています。灯台を兼ねた常夜灯が川の端にあり、その横にも昔の鹽田橋という文字が深く彫られた標柱が残っています。その横に公園道の道標があります。

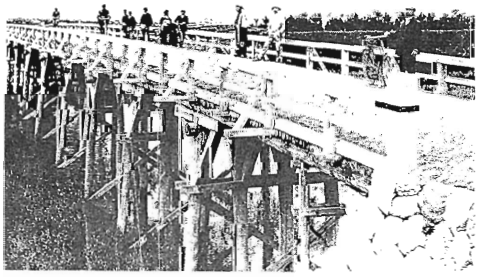


昔の塩田橋

標柱と道標の位置



灯台常夜灯



大正期の養老橋

〔岐阜図書館（塩田橋、養老橋写真は、不破郡案内アルバムより〕

〔養老街道の綾野付近の変遷〕

塩田橋へは西南方から美濃路、多良街道、養老街道が集って、この付近はたいへん繁昌しましたが、今では約五〇〇㍍上流に新橋が架かって、交通も一変してしまいました。

塩田橋を渡ると経塚のある正圓寺があります。さらに南に行き西方に円空仏を祀る綾野報恩寺を拝して南に進むと、野口の里です。現在は養老橋が見えますが、大正三年頃の養老橋を不破郡案内のアルバムで紹介しましょう。自転車利用の人が数多く見られます。大正二年に養老橋が架かると、養老新道が整備され、養老への道は次第にこちらへ移ってきました。

2、段海渡し跡

街道は野口を経て相川を越えこれより、養老町、祖父江段海村へあがります。昔は往来も頻繁であったと思われ、四㍍巾の道が現存しています。色目川の合流する所で、川巾は広く遊水池*の働きをしていました。葦などの生い茂った河川敷で、平水時でも流路の巾が三〇㍍もあります。この河川敷で芝居を興業したこともあり、その利益で祖父江の神社に鳥居などを寄進したという記録があります。

この道は、鎌倉街道の一部です。

3、蛇持経塚跡

養老街道から西方七〇㍍程の所に柿*経池と呼ばれる池があります。昭和八年(一九三三)に池の底から沢山のヒノキの薄板が発見されました。その板には経文が書いてあり、柿経といって町文化財に指定され、池も史跡に指定されています。

段海渡

柿経塚

〔養老公園のはじまり〕

明治十三年、養老公園が開設されると、養老街道は養老公園道として脚光を浴び、時の県令（知事）小崎利準も開発に力を入れ、養老公園内に説教場を建設して行楽客の誘致を計りました。その落慶法要に時の本願寺門跡嚴如上人をお迎えしましたが、段海渡には舟橋を架けてお待ちしたと伝えられています。

〔段海渡しと付近の話〕

段海村や祖父江の部落には渡し舟がありました。久瀬川の舟運は桑名と大垣赤坂の間を石炭の輸送や、石灰を帰りに運び、その途中の休憩地点として、この付近が繁昌したそうです。

明治の初め頃は水量がかなりあって舟運は大へん利用されました。赤坂・養老鉄道の出来るまで発展していたといわれます。

祖父江渡しも浅草や輪之内方面への近道としてよく使われたと聞いています。

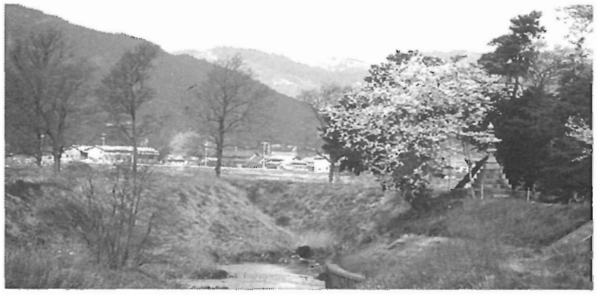
4、飯田道

飯田道は祖父江、蛇持を経て旧小畑小学校の西を南に抜け、西に向って村外れで小畑川を渡り、直江に通じていました。

明治の元勲伊藤博文公の養老清遊時も人力車でここを通られたといわれています。

5、飯田から直江へ（小畑川を渡る）

養老街道は、春は桜、夏は蛍で知られた小畑川を、飯田村の西南端で渡ります。写真右端の大神宮灯明の少し上から低い欄干の木橋が架っていて昭和初期までこの旧小畑橋が実用されました。この橋を渡り堤防を東へ下りると道は一条に直江に向います。道の両側は殆どが水田地帯で春になれば、れんげ、たんぽぽも咲き乱れ行人の目を慰めましたが今では大半が住宅地となっています。この飯田から直江へ移る間の土地は昔はよく見透しが利き、直江入口の大神宮灯明もよく見えました。そして現在では昭和四〇年より名神高速道路が開通し東西に視界を遮っています。従って養老街道も名神の下をくぐることになります。



小畑川を渡る

6、式内*御井神社古地

名神のマンボ*関ヶ原41を潜って南へ出ると直江はもう目の先で養老郡農協多芸支所前へ出ますが、ここで一寸左折して少し東へ行くと、丈の低い数本の松に囲まれた狭い境内に石碑が見えて来ます。表記に、「式内郷社御井神社古地」とあります。金屋村の御井神社は水害や兵火のために今は春日神社境内にうつされていますが実は千年以上前の延*喜式という法典に記載されている格式高い明神であることがわかりこの辺りの古代に興味を覚えます。

御井神社古地

7、直江村へ入る

直江村の入口には昔は東側に大神宮灯明があって行く人の目印となりましたが、今は移転してありません。今は西側に数年前建ったばかりの自治会館がスッキリとした姿を現します。また少し東には村社春日神社が本郷から移転されています。

直江の村は牧田川を挟んで南北に分れ、通常、南を本郷、北を新屋敷と言いますが、養老街道はその新屋敷のほぼ中央を貫いて牧田川の左岸堤に向います。

8、蓮光寺　真宗大谷派　本尊阿弥陀如来

寺標と高塀

蓮光寺は開基了善が今から凡そ五二〇年前、文明十一年（一四七九）当時の本山、山科の本願寺へ詣て蓮如上人に帰依し、出家得度して弟子となり、一寺を建立したものであります。

写真右端の寺標の「浄土真宗霊瑞山蓮光寺」というこれらの文字は宗祖親鸞の直筆を国宝坂東本教行信証影印から撰り集めて謹刻したものです。

寺宝に聖人木像、蓮如上人筆六字九字名号、証如寿像があります。

多羅葉

境内には町指定天然記念物多羅*葉が緑濃く樹勢を誇り、また春先には京都円山の祇園桜の分株が百余年の樹齢を湛えてあでやかに寺庭を飾ります。

9、直江新屋敷灯明と旧高田橋跡

蓮光寺を出て街道を真南に左岸堤に向うと、正面堤上に、大神宮灯明が見えて来ます。これには創建「大正十一年九月」の刻銘がありますが、ここへ移転されたのは昭和十年頃でした。直江北の入口の目標だったものが村南に移り、本郷村下の灯明と相対応する形になりました。上の写真で灯明の東（写真左端）に見える茂みは馬頭観音の茂みで桜も数本あって西側の松とともに象鼻山を背景に一幅の景を提供しています。数年前まではこの東五〇メートル位の処に黒々とした石垣が残っていました。それが旧高田橋（北）の遺構であったと伝えられています。

新屋敷の灯明

10、牧田川をわたる〝徒渉か橋か渡しか〟

牧田川は天井川*で砂礫の堆積が甚しく、川底が家の棟を越す様なことも屢々ありました。それで村人は川浚えに駆り出されて年々苦しんだものです。表面に水は無くても水は川原の下を潜流して堤外に滲み出で溝や池となり、小川となって流れました。平地で二㍍も掘れば清涼な水が滾々と湧き出て日常生活には誠に有難い水湍る多芸の里でした。ところが牧田川は表面では一年の中、大半が旱水で川は涸れていました。それで行人は殆どが徒渉で川を渡ったものです。しかし、大雨や台風の後が一番危険です。上流から鉄砲水と言ってアッと言う間に水が一㍍位の高さで押し寄せて来るのです。昭和三十年に町水防団員の村役の数人の中でも屈強な一人、早﨑善五郎氏が、この鉄砲水のため尊い犠牲となられました。大雨の後の徒渉には余程の注意が必要です。

明治の中頃になると新屋敷と本郷との間にはかなり堅固な橋が架っていた様であります。別項の直江北渡しの交通量から見ても、もうかりそめのものではすまされないし、新屋敷側の橋詰の石積を見ても堅固なものであったと見られます。古老の話によると、「橋は板橋で、低い欄干の付いたキチンとした橋だったと思う。堤へ上って下へ下りると坂本屋という店があって一服した」云云

水量が更に増して架橋で間に合わないときには速に渡しに変えねばなりません。このことは下段を参照して下さい。

11、直江　牧田川渡船場跡（直江北渡し）

直江渡船は養老街道の重要な機関の一つでした。牧田川は年間、旱水二〇〇日、流水一六五日として越立人二六〇〇〇人余、人力五〇〇輌、荷車二〇〇輌が見込まれていました。乗場は写真の灯明より約一〇〇㍍東で突堤の直ぐ西、対岸は本郷中瀬古ですが、牧田川改修工事（昭和六年）のため現在では川の中流に埋もれ、同時に古来の墓地も北直江の現在地に移転を余儀なくさせられました。

右岸堤より北渡し跡を望む

12、北渡しを上って本郷へ

右岸堤に上ると街道は真直に西光寺前を通って村下灯明に向います。しかし牧田川改修以前は堤防の南沿いに三昧があり、焼場まで行くには下道を西へ数十㍍も歩かなければなりませんでした。路脇には大小様々な古いお墓が並んでいて、とても淋しい感じでした。桑畑が多く土手には浅茅が一ぱいで、子供たちは桑の実や「つばな」をつんで遊んでいました。この辺りは今は河川敷か堤敷となっています。

13、西光寺　時宗　本尊阿弥陀如来

もと天台宗で七堂伽藍を具備した大寺であったと伝えますが応永一七年（一四一〇）時宗に改宗、前は字経堂（きょうどう）にありましたが度々洪水にあい、現在地字村下に移住、旧地「経堂」の名のみが昔を偲ばせます。

境内には元亀二年（一五七一）天正元年（一五七三）の一石五輪塔があります。

西光寺

春日神社跡

14、春日神社跡

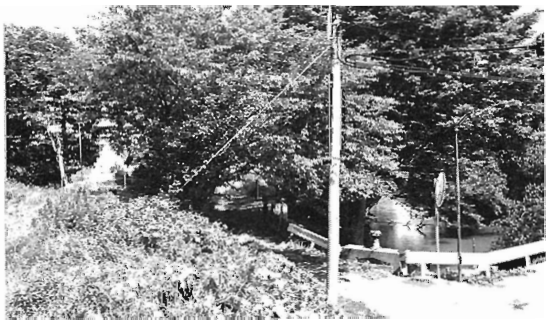
直江の氏神春日神社は前はこの西光寺の南隣にあって長い参道をずっと奥まで行くとささやかな神さびた御社殿がありました。北直江の人たちは太鼓車を組毎にガラガラと引き乍らドンドンと賑やかにお詣りしたものです。

15、村下灯明

大神宮灯明　本組中大正十年九月、この灯明から北を窺えば道は真直に右岸堤に延び左岸堤灯明も同一線上に見えます。養老街道はここで左に折れ牧田川支流を越えます。

16、牧田川支流直江南渡し（村下渡し）と旧高田橋（南）

養老街道を村下灯明の手前で左に折れると牧田川南の川原に出て渡しがあったのですが今はミズノ工場のフェンスとフェンスに挟まれた狭い道となってしまいました。少し下りて行くと中程に鉄筋コンクリートの橋が架っていてこの橋長さ約三〇メートル。明治十年の古文書によると、仕様書に「杉板幅一尺（三〇センチメートル）厚二寸（六センチメートル）長さ二間のもので二〇枚」とあります。水量四合までではこの橋を用い、これで不可能の時は渡舟を出して五合目まではこれで対応せよとありますから五合目以上は川留めとなったことと思われます。この橋は現在のコンクリ橋より多少南へふっていたかは知れませんが西端は村下灯明の基壇でありますから大差ないと考えられます。それで行人は直江村下を通って島田村へ越し、それから堤防を廻ってそれぞれに高田の町へも降りて行ったことでしょう。大正天皇も皇太子の時「二つの橋」を通って高田小学校へ着き小憩せられたということが母の語り草であったと言っている人もあります。



村下灯明

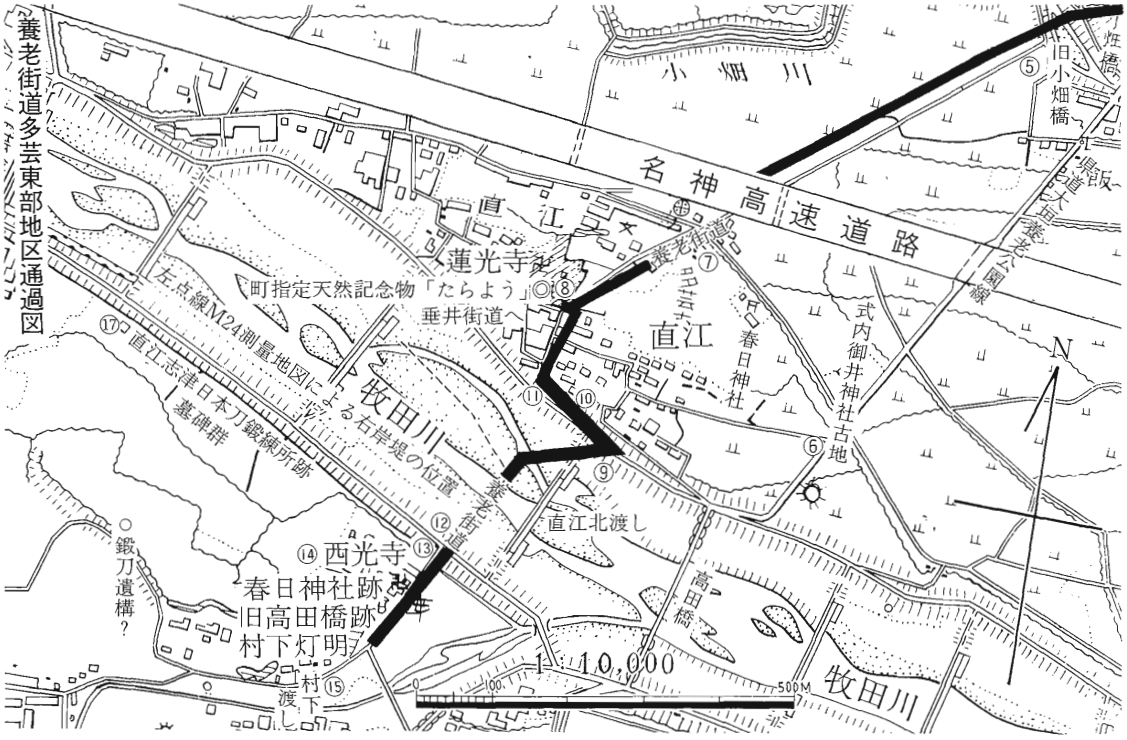
17、直江志津日本刀鍛練所跡　町史跡

名匠志津三郎兼氏の一族、兼俊は弟子を連れて直江に移り住み、直江六郎と名乗り、盛んに鍛刀し、後世に直江志津とよばれる名刀を残しました。鍛練所跡は南直江西北部にあり、直江志津派の墓碑群も近くに残っています。

近頃、刀鍛冶の鍛練所跡らしきものありとの報告がありましたので、専門学者の鑑識が望まれる次第です。場所は墓碑群の西南で、このあたりは直江志津派の刀匠たちが群居して鍛刀していた姿が目に浮ぶようです。

直江志津鍛練所跡と墓碑

村下灯明



18、元町通りの「はたご」風旅館と、高田の街内本通り

牧田川の旧堤防より坂を下り元町通りに入ると、昔風の宿場宿の形を残している旅館が見られます。そこを南に行くと商店街の中心に出ます。西に行くと田代神社に行きつきます。

高田街内には古い商店風の店もまだあります。春夏秋冬の祭り行事の有る時は賑わいます。春祭りには軸（やま）がこのせまい街内を両側の露店を押しのけてゆらゆらと通行をします。

この本通りで、九里半街道に接します。

元町通りの旅館

高田商店街

19、養老平成記念公園

田代神社裏の旧高田小学校の跡地に作られました。

大正天皇皇太子の時の休憩された事を書いた石碑、藍田学舎の跡の碑、山口俊郎先生（作曲家）の曲の石碑や、二宮金次郎の像等が並べてあります。養老町制四十周年を記念してこの地を公園にし、からくり人形時計（ふれあいタワー）の池を中心に設置して、カイコウズ、ハナミズキ等の花壇を配置したモダンな記念公園が作られました。

花壇カイコウズ

ふれあいタワー

上から
- 入口標石
- 藍田学舎記念碑
- 金次郎の像と曲碑
- 公園のベンチ

20、田代神社

創建不詳　境内に別当寺として天台宗の寿量院がありましたが、明治初年に神仏分離のため廃寺となり、寺宝は即心寺預りとなり、寺の建物は元町役場として使用されていましたが、現在は社務所になっています。

町文化財の奉納算額、粥施行図等の絵馬が保管されています。

21、専念寺　真宗大谷派

本堂の狭間は高田の有名な彫刻家彫忠（早瀬忠兵衛）（一七八五―一八四〇）の作です。

昔からこの寺の報恩講（十二月十九日）はまことに盛大で近在近郷からの参詣者で賑わいます。高田坊として高田地区の中心街にあります。

22、愛宕神社

創建不詳、神社例大祭は五月十九日です。祭りの軸は県指定重要文化財で三輛あります。絵馬の粥施行図は町指定文化財で田代神社に保管されています。

軸三輛の内二輛には、からくり人形が仕掛けられ、おはやしにつれ操られます。他の一輛は獅子舞がついています。境内には北野天神社があり、八月初旬に祭りが催され、夏の天神祭りとして賑わいます。

23、景陽寺　真宗大谷派

創建天文十四年（一五四五）

東の専念寺に対し、西の景陽寺として高田寺院の双璧であり、報恩講は盛大に行われます。

書院の襖絵は日比野鶴翁筆の絵で（町文化財）あります。

24、押越八幡神社

養老街道の中程の高田中心街を出はずれるところに押越八幡神社があります。昔は大杉（幹回り八㍍、高さ一八㍍）があり石畑方面からは、目標になっていましたが、老樹で洞もあり台風に危険なため切断されました。そのなごりが道端に展示されています。

神社内には文化財がたくさんあります。摂社も金刀比羅神社、神明神社と境内はずれに不動明王も祀られてます。

拝殿内に絵馬数点、外に社務所内の十数点も町指定の文化財になっています。境内にはなぎ*（梛）の木、（町天然記念物）高札場（町史跡）があり、刀剣四振も町文化財です。

八幡神社

梛（なぎ）の木

大杉の切株

押越八幡様として境内も広く休憩場でもあったことで、社の北には昔人力宿もあったので、高札場も出来ていたことでしょう。人が集まれるため明治二年の養老一揆の集合解散場所となったことでも有名です。

25、大神宮の灯明

神社を南に少し歩くと町はずれの追分け、押越部落の東と西の分かれる所に灯明が見えます。大杉と共に目標であったことでしょう。大神宮が祀られていて伊勢道との合流点を案内しています。

高札場

大神宮の灯明

26、高田地区の街道の概要

牧田川の改修によって高田地区は大きく変わってきました。

現在のミズノ工場や高田中学校は、天井川であった牧田川の河川敷の中に出来ました。直江を半分に南北に寸断し多芸橋から直線に高田橋までと改修され、昔の広い川幅は土砂が堆積して河川敷として広い原になっていました。

金草川もそうでした。舟で荷物が運べる位の水量と川幅があったのです。輪中の堤防も削られて道は変ったのです。交通機関も発達して昔の町筋では商業もなりたたない位にせまくなり、駐車場が街道の脇に必要になって来ました。

田畑をつぶしてバイパスをつけなければならなくなって来たわけです。上の地図で新道が段々と変って出来たようすもわかります。

石畑から養老公園終点まで

そで取り宮跡から石畑集落へ

27、石畑付近

押越の八幡神社横を南進すると街道は、押越集落をすぎる辺りから、石畑地区内の養老警察署裏通りまで、戦後の土地改良により田園となり、街道は消滅してありません。

警察署裏辺りに、以前は雑木に覆われた、大きい森がありました。「袖取りの宮」といいました。この宮も前記土地改良の時、石畑の大桑神社の境内に移転され、跡地は広場となっています。

街道は宮跡を右に見て、石畑集落へ入ります。

集落の入り口南側に灯明がありましたが、この灯明も土地改良のとき、集落街道横にある淨誓寺の門前近くに移転されました。

淨誓寺の本堂の南側に「イヌマキ・*ワビスケ*」（町天然記念物）の古木があります。「ワビスケ」は、椿の一種で冬ピンクの花がさきます。安政四年（一八五七）本堂焼失のとき、門前の「イヌマキ」と「ワビスケ」だけが、火熱に耐えて残りました。

この辺りから街道は、少しずつ坂道となります。

旧石畑小学校跡（今は町の「ふれあい広場」）門前を南西に白石方面に進みますと、北から南へ通ずる伊勢街道と交差します。

戦前この辺りは、雑木林や畑ばかりでしたが、近年になって住宅などが建ち始めました。

28、柏尾谷

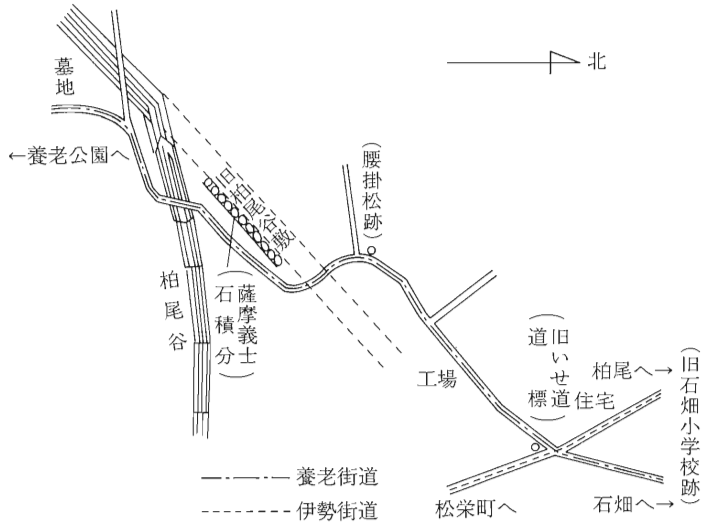
街道は、南西方向へ、ゆるやかな坂路となり、雑木林の間を急に左へ曲るところに、通称「腰掛松」があり、松の

旧石畑学校門前から白石方面へ

根が大きく露出して、丁度腰をおろして、一休みをするのに便利でしたが、この松も近年松喰虫の害によって枯死しました。

街道は反対に右に曲ると、旧柏尾谷敷を越えて、すぐ右側に宝暦年間に薩摩義士による、旧柏尾谷右岸白石村の護岸石積工事の六五間（約百十二メートル）の一部が、残っています。

薩摩工事の一部を右に見て、新柏尾谷を越えると、街道は右側に養老霊園の広場に出ます。更に南西に進むと、白石集落へ入ります。この辺りは濃尾平野が眼前に見ることができます。



柏尾谷薩摩義士石積及び養老街道と伊勢街道交差点付近

白石大神宮

元正天皇行幸遺跡

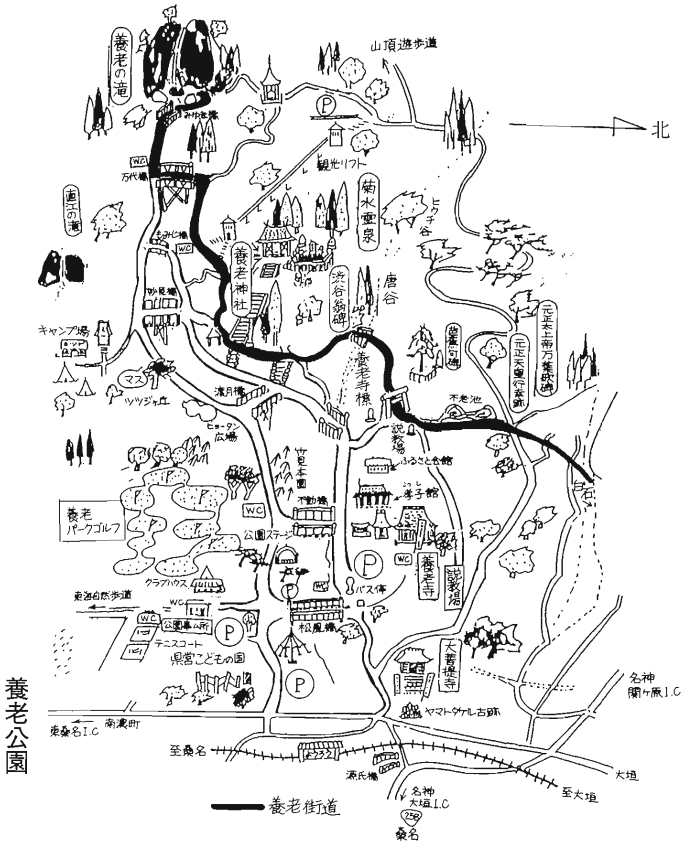
29、白石大神宮

白石集落の中程の街道横に大神宮の灯明があります。白石大神宮の近くに、正慶寺があり、境内には、チャボヒバ（町文化財）があります。

30、元正天皇行幸遺跡

白石集落を通った街道は、養老公園内に入ります。右側に「元正天皇行幸遺跡」（県史跡）の標柱があります。

ここは従来行宮神社で、祭神は元正、聖武の両帝でしたが、明治四二年養老神社に合祀され、以後は養老神社のお旅所となっています。



養老公園

31、養老神社鳥居付近

街道は、水路を右に見て南進し、程なく養老神社の鳥居の前に出ます。鳥居から左下方面に「元正院養老寺滝護不動明王」の寺標があります。坂を下った近くに養老寺（国、県、町文化財多数）があり、多芸七坊の一で千二百年の法灯を嗣ぐ唯一の寺です。

また養老寺の寺標近くに「大谷派養老公園説教場」の寺標があります。舟岡山の尾根を下ったところに、明治初年建立の説教場があります。

養老神社鳥居

街道は、鳥居をくぐって途中唐谷（火うち谷）の入り口に、養老公園開設に私財を投じて協力した、旧笠郷村大野の渋谷代衛翁の顕彰碑があります。

鳥居をくぐる辺りから、急傾斜地を街道と水路が共に狭くなります。

程なく養老神社の社標と高い石段の前に行きます。

32、養老神社

養老神社の社標と石段

石段のたもとには、菊水天神と、たき道の道標もあります。古い杉古立ちの中の石段を昇りつめると養老神社で祭神は天照皇大神、元正天皇、聖武天皇、菅原道真公（出土品県重文）です。社の横には、菊水霊泉があり、元正天皇が浴されたと伝えられています。

境内には、菊水泉銘碑の外数多くの名碑があります。養老神社の石段前からは、急な坂路のところも多く、滝谷の水の音もだんだん高くなります。街道は滝谷にかかる万代橋を渡って養老の滝へ到達します。

33、養老の滝

明治十三年に養老公園開設までは、滝への本通りには、元正天皇行幸遺跡を通り、養老神社前から、滝谷左岸を登って、万代橋から滝への道で、養老街道もこの道を通っていました。

従って、養老寺への参道は、養老神社の鳥居前から、寺標にしたがい坂を下って行きました。

養老の滝

◎担当委員　佐竹米市・日野泰道・中村泰治・田中憲策

津島街道

津島街道の概要

津島街道沿いの地域は、大跡新田、有尾輪中、下笠輪中、根古地輪中、大場新田輪中、大牧輪中など、その開発は江戸時代初期でした。

当時、この開発途上地域の小集落農民の生活は苦しく、他地域との交渉も少ない状態でした。

その生活を支えたのは、大きな下池と大小の池と川から取れる魚介類、加えて、冬の渡り鳥でした。

これらの産物は、西は養老山麓を通り、牧田街道を経て、中山道沿いに販売されるようになり、時代が進むにつれ、東の今尾、高須、津島ラインが結ばれ、人の往来、物質の交流文化の流入が行われました。

更に、揖斐川右岸に位置した根古地湊は、濃州三湊（烏江、栗笠船附）と今尾湊の中継点として、津島街道の重要地点として、発展しました。

津島街道の養老町内地名

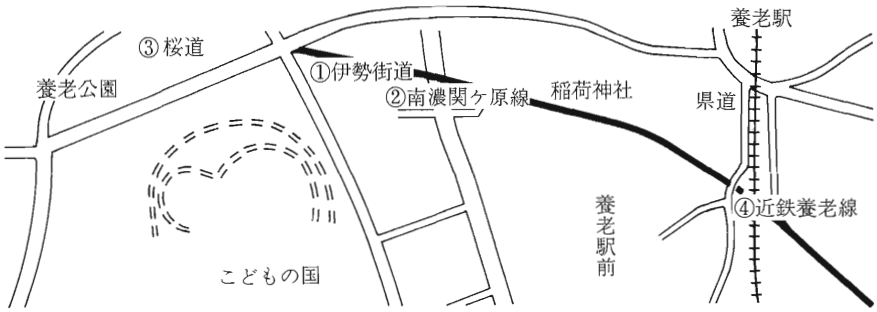
養老公園
鷲巣
有尾
田
三ツ屋
大場
根古地
大巻

養老公園の子供の国東北隅の伊勢街道と津島街道との接点

養老町大巻の渡船場のあった堤防の内側にある農協倉庫と旧かめや

1、津島街道（今尾街道）

同じ街道を二通りの名があるのは、昔は津島を中心とし経済圏が、今尾橋が架橋されてから、暫次今尾町側の方に、経済圏が移ってきたことからであろうと思われます。



2、津島街道の起点

岐阜県こどもの国の東と北の隅に近鉄養老駅から滝への近道、「桜道」（写真③）と、古道の伊勢街道との交わる地点（地図①）が津島街道の起点です。

（写真(1)）養老駅から養老の滝への東から西への登り道が、桜道です。

中央から東南の下り道が津島街道で、南北に通じている南濃・関ケ原線（地図②）をまたぎ、更に下り坂は近鉄養老線の軌道へ（地図④）と直進します。

（写真①）

直進してきた下り坂の道は、以前はここに踏切がありましたが、現在はこの地点より、北にあります。

写真②は近鉄養老線の軌道を越え、境界線を越え、現在の町道を下っていくと、（地図⑤）の中村屋（新聞米穀酒販売）の前を越えます。県道大垣・桑名線を越えて、津屋川堤防へ直進します。

3、津屋川の堤防へ

途中、野村組資材倉庫（写真②）南（地図⑥）を過ぎ、津屋川に架かる「新道橋」（地図中⑦）を渡ると、津屋川堤防へ上ります。

この付近では、今でもこの道路を「津島街道」と呼んでいます。

（写真②）

4、津屋川の道路を南東へ

鷲巣より津屋川堤防の道路へ出ると（地図①）一帯は、水田が遠望できます。昔はこの辺りを「大跡輪中」*と呼ばれていました。

右手に津屋川を見ながらゆるやかに曲がった堤防は、鷲巣に続く北小倉、南小倉の一部の集落が続いています。

集落の中にかくれて見ることができません

が「上多度自治会館」（地図②）「上多度小学校（地図③）があります。

（地図①）

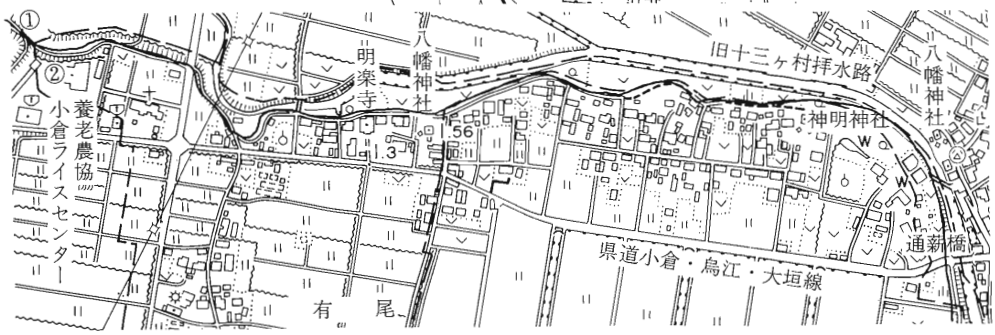
5、有尾のライスセンターから東へ折れて旧十三ケ村排水路堤防へ*

（地図中①写真①）は、津屋川堤防と、旧十三ケ村排水路堤防へと、東へ折れて進みます。

写真①の石碑は、その分岐点に立っている「整地碑」で、ここから、下り坂となっています。

この整地碑の東の堤防下に有尾のライスセンターがあります。

この地は南濃大地震で校舎が倒壊した昔の「上多度小学校」の跡地であります。



（写真①）

①有尾の明楽寺裏

②田村八幡社裏

6、旧十三ケ村排水路の堤防道路

上多度地内の有尾と同地区に沿って、西から東へ進む街道は、旧十三ケ村排水路堤防上にあり、草深い小道に津島街道の面影を残しています。

県道養老・今尾線（現在は町道）が開通されるまでは、この街道が生活道路でした。

堤防沿いに、神社やお寺や民家が連なっています。このことは出水に安全な堤防沿いに集落が形成され、分家などが平地に建てられていったことを示しているようです。

有尾のライスセンターに続いて、小遊園地、明楽寺（写真①）、八幡神社、田村の集会所、神明神社（写真②）、そして、近藤藤嗣氏宅前の県道小倉・烏江・大垣線との交差する地点へ出ます（地図①）

〔旧十三ケ村排水路　（略称　十三ケ村落江*）〕

この川は、鷲巣川の流域であった時代もあり、南方の低地、下池に注いでいたと言います。

徳川時代の初期に、大跡輪中、有尾輪中が完成しました。しかし、牧田川、金草川、津屋川の出水がある度に洪水の被害を受けました。

下笠輪中は徳川時代の寛文年間に完成されました。出水、洪水の度に破壊され、修理・補強されて頑丈なものになりました。

南部の三ツ屋には、八幡神社が堤に建っています。多くは下笠輪中が伊勢湾台風後の土地改良で輪中堤の土は、取り除かれ、水田や畑になりました。

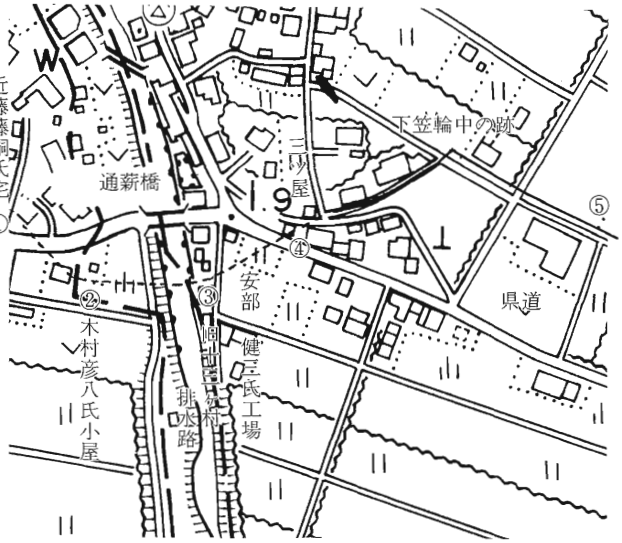
有尾輪中は、西と南の津屋川と、北と東の大跡、中島からの水を防ぎました。

他の輪中と同じ徳川時代の初期に完成しました。

東南の輪中堤は、美しい護岸の松林が津屋川堤まで延々と続いていました。

残念ながら、太平洋戦争中に伐採されました。

7、三ツ屋の旧十三ケ村落江



（地図２）

（地図①の地点）の県道、小倉・烏江・大垣線が、田村の近藤藤作氏宅前で交差する地（写真①）から、南へ約一〇〇米の地点は旧木村彦八氏宅近く小屋（地図②）の辺りの地点（地図②）から、旧十三ケ村落江の対岸の、安部健三氏宅の糸繰り工場（地図③）（写真②）を結ぶ線が渡船場でした。

三ツ屋の渡船場は、落江の堤が完成する以前は、出水や洪水の度に川巾は定まっていなかったと言われています。

（写真①）

県道と街道との交差地点

昔の渡船場跡

（写真②）

8、三ツ屋から大場の廃堤の下笠輪中を行く街道

旧十三ケ村落江を渡ると（写真③と地図③）、今は廃堤となった、下笠輪中堤跡を、大場へとを進みます。

三ツ屋の三又路から、廃堤への入り口（地図④）で、既に廃堤となり、土は削り取られていますが、写真④は根上りのねずみもちの枝わかれしている下の部分は土があったことを示す貴重な木です。

下笠廃堤入り口

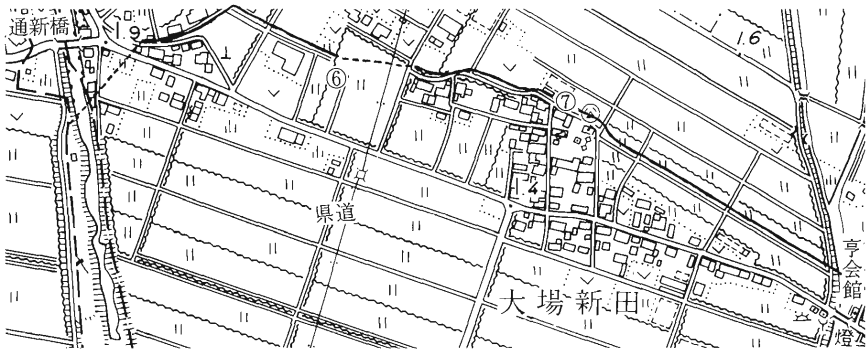
（写真③）

根上がりのねずみもち

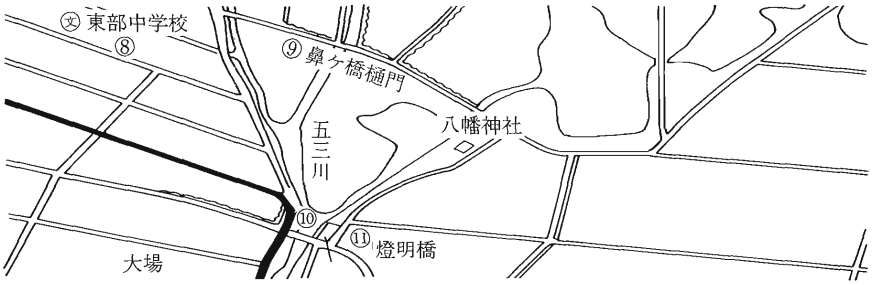
（写真④）

街道は廃提で土を削りとられて平地となった道路を東へと大場新田の方向へ（地図⑥）八幡神社（地図⑦）へと、街道は進みます。（地図③）

大場の八幡神社（地図⑦）の前の水田の中の直進道路を東へ進みます。



左手養老町立東部中学校（地図⑧）その東に三つの樋門をもつ鼻ケ橋樋門（地図⑨）と南へ進むと大場大神宮（地図⑩）が五三川に沿ってあります。



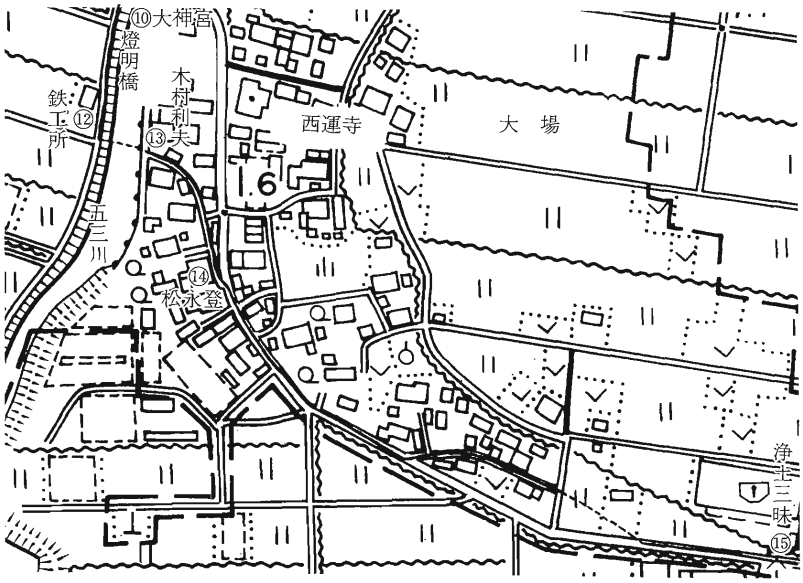
（地図③）大場燈明橋附近

9、廃堤の下笠輪中堤から　大場・根古地へ

大場の大神宮（地図⑩）から燈明橋（地図⑪）を渡らずに五三川を南に下ると、五三川沿いの鉄工所（地図⑫）と五三川対岸の木村利夫氏宅（地図⑬）を結ぶ地点が、街道の渡船場でした。

この町道を南東の方へ進むと、松永登氏宅の南（地図⑭）の地点で、燈明橋を越えて南進してきた養老・今尾線と合流します。

この道が東へ折れ、一部道は北へそれますが、やがて道広いに合流し、更に東へ進むと、根古地の浄土三昧（地図⑮）と天照寺へ進みます。



10、大場の大神宮と五三川

五三川にかかる燈明橋の北西隅にかかる大神宮（燈明さんという。昔、村人が毎夜点火したと伝えている）があります。その北に、鼻ヶ橋（はながし）の地の樋門*があります。ここは、上流の下笠輪中と下流の輪中が、用・排水について、利害が相反して、降水・渇水時によく水争いのあったところです。伊勢湾台風後の土地改良で、位置、機能も変わりましたが、その面影を留めています。

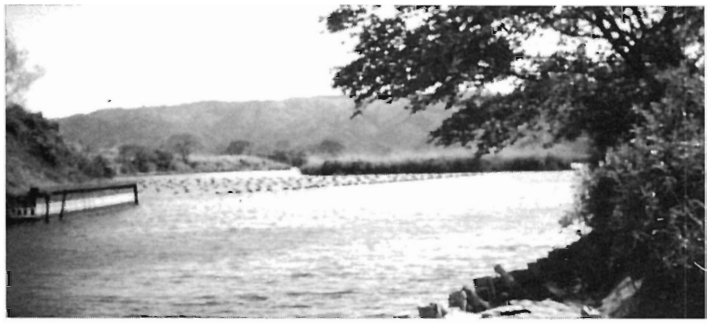
大場燈明橋から鼻ヶ橋を望む

洪水時には約束に基づいて排水し、この川を通して、津屋川へ落水し、渇水時は、伊勢湾から揖斐川、津屋川、五三川と逆流する水を利用して用水にしました。

用排水機のなかった時代の住民の知恵です。

この下流三百メートルに大きく東にふくらんだ半月形の池が川にくっついています。これを「押堀（おっぽり）」といいます。

昔、何度も洪水で破堤した跡が、下流にいくつもあります。


大場の押堀

〔五三川の形成〕

下笠輪中は江戸時代の初期に出来ました。低湿地の開墾であったので、排水に苦労をしました。下笠輪中内の栗笠、船付、大野、下笠、五ケ村のうち上之郷村を除き、他の四ヶ村だけが合同して「除（よけ）」（小さい堤防）で回って排水路をつくりました。これが下笠輪中悪水落江です。

この悪水落江は、根古地輪中、釜段輪中、小坪輪中などの境を借地して、全長二六〇〇間（約四七〇〇メートル）小坪で津屋川へ排水しました。

寛文一一年（一六七一）と翌年にかけて関係する八地区間で、江戸米や藻苅りなどにつき、いわゆる「八通証文」が取交わされました。

「六〇〇間除」を作るなど、当時としては大工事で、多額の費用がかかりましたが、下笠輪中の生命線でした。

・明治三十年四月一日笠郷村が誕生してから上之郷も加入して、笠郷村が管理することになりました。
・大正八年池辺村の大字大場（大場新田を含む）根古地・根古地新田（現在の瑞穂）の三大字と笠郷村の五大字によって、五三普通水利組合が出来ました。
・昭和二七年四月二日瑞穂地区（旧根古地新田）が組合から脱退して、同年七月四日、五三土地改良区となりました。
・昭和三七年三月三十一日、準用河川となりました。
・昭和三九年七月十日、施行河川となり、一級河川です。

鼻ヶ橋圦*跡

「下笠輪中悪水落江」がつくられた時、下笠輪中内の悪水は、東八間、西八間といわれる排水路などより「細池」付近に集めました。

この悪水を現在の大場新田の集落北側を通っていた下笠輪中堤の四ヶ所に圦を設け、悪水落江へ落しました。これが「鼻ヶ橋圦」であります。

大場新田鼻ケ橋圦

この輪中堤も圦も伊勢湾台風後の土地改良で姿を消し、「圦」は新しく現在地へ移りました。

大場の五三川を越し、村道を過ぎると、浄土三昧に宝暦治水に命を捧げた義士の墓が右に見えます。

11、薩摩義士の墓

宝暦治水（一七五四～一七五五）の時、赤痢が流行して、多くの藩士が異境の地で病苦にあえぎながら死亡されました。

これらの人々は、天照寺に当時建てられた三墓の墓と、他は浄土三昧にある大正二年（一九一三）「薩摩工事義没者の墓」が建てれらた二十四人の共同墓碑とがあります。

更に、昭和四十六年慰霊堂が建てられました。

毎年、八月十三日、養老町薩摩義士顕彰会が慰霊祭をつとめています。日常は、地域の人が、供花、清掃を行っています。

この二つの墓碑は、岐阜県の史跡指定になって、保存につと

薩摩義士の墓

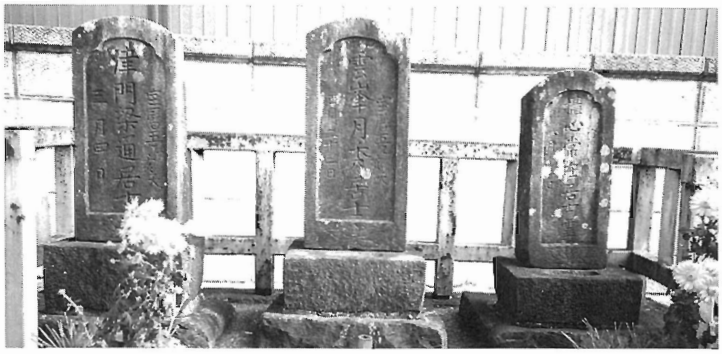
めています。

天照寺には、昭和三十四年八月、九月の二度、根古地堤決潰による大洪水の時、この墓地が濁流に直撃されました。

荒れ果てた住居、田畑、道路と共に墓地も大変荒れました。

復旧工事が進み、翌年、六月、道路沿いから発掘された土がめ、発掘時の写真、宝暦治顕彰の資料を提示した資料室があります。

往時を偲ぶ貴重なもので、町文化財に指定されています。



天照寺にある義士の墓

資料室

12、根古地の道標

水田地帯から堤防へあがると、道標が立っています。東から西へ向かってきた旅人は、ここで立留まり、堤防を右(北)へ進むか、左(西)の坂道を下るか迷ったようです。

竹ヶ鼻の綿商人、佛佐吉といわれた篤行の人が、天明九年(一七八九)に親切な道しるべを建てたと伝えられています。

碑には、「水の深い時は堤防を右へ廻るがよい。水のない時は、道がわかりにくいので、村々で聞いて行くがよい」と書いてあります。(原文は候文)

大正二年(一九一三)池辺北部耕地整理組合の蒸気機関排水機が出来るまでは、この低湿地では、まとまった降雨があると、村道は水びたしになって、往来が困難となり、津屋川への自然排水が緩漫であったので、苦労をしました。

根古地の道標

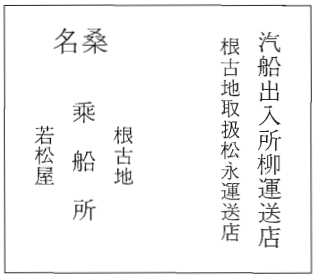
13、根古地湊

根古地堤の村はづれに湊がありました。昭和三十四年の八月集中豪雨、九月伊勢湾台風によって、堤防が二度決壊しました。それと同時に自然の良い湊も面影を失い自然護岸はなくなってしまいました。石垣護岸に変わり、更に安八水害の時、牧田川の高水位を経て、更に防護壁は高くなり、その後川の埋立てがされて、広大な河川敷地になりました。

この港は、古くから、上流の船附、栗笠、烏江の三湊と今尾湊の中継地に位し、水上交流と津島街道の陸上交通とが重なる水陸交通の要衝でした。港に関係の深い若松屋に看板が残っています。

根古地湊跡

根古地公園内大神宮



若松屋の甲板二つ

明治三十五年、揖斐川と牧田川の合流地点が引き下げられ、船付から、大巻東（現況）に移り、水門川によって直接大垣の船町に通じ、大垣と桑名、四日市、名古屋の熱田と結ぶようになり、物資と人の交流が多くなり、大正八年の養老線開通、乗合バス、更にトラック輸送時代と、次第に河川交通の機能がいらなくなり、更に地域では、昭和三十四年の水害後河川敷の畑を建設省に売却し、一戸一舟の小舟もなくなり、湊は完全に消えました。

14、宝暦治水役館趾

根古地を過ぎて、右手に瑞穂排水機から一段堤防が高くなります。左に牧田川、牧草地、背割堤、その東が揖斐川と広茫の天地が展開されます。出水時は遊水池となり一大湖水の景観に豹変します。

平田靱負の辞世歌碑

平田靱負の像

道が左に曲がる右手の民家の南に、宝暦治水の役館跡があります。

ここは、お手伝普請の総奉行、平田靭負が、宝暦年間の広大・困難な工事を指揮した奉行所のあったところです。

工事は困難を克服して完了しましたが、八十余名の犠牲者を出し、約四十万両の莫大な費用を使って、島津藩の借財を重ね、容易に返済できないことになった二つの責任を取って自刃したところです。

役館跡全景

正面の巨大な碑は「薩摩工事役館趾平田靭負翁終焉地」と東郷平八郎が書かれました。

靭負の辞世歌碑は

住みなれし里も今更
名残りにて　立ちぞ
わづらふ　美濃の大牧

と、島津家三十一代忠秀氏が書かれました。

その外、左に平田翁の小像、右に大像があります。

15、大巻の渡船場

東へ直進すると、左に牧田川と揖斐川との背割堤があってここから揖斐川の本流で、今尾側の樋門が見えてきます。長良川と分離された大榑川の排水がここから揖斐川に排水されます。その下手に今尾の渡船場と港がありました。

それは、明治三五年以降、旧今尾橋が始めて架けられた、昭和十三年（一九三八）まででした。

養老町側は、堤内の小段に、旧池辺村役場、地域の需要が多かった「かめや」があって常滑焼の土器を売っていました。

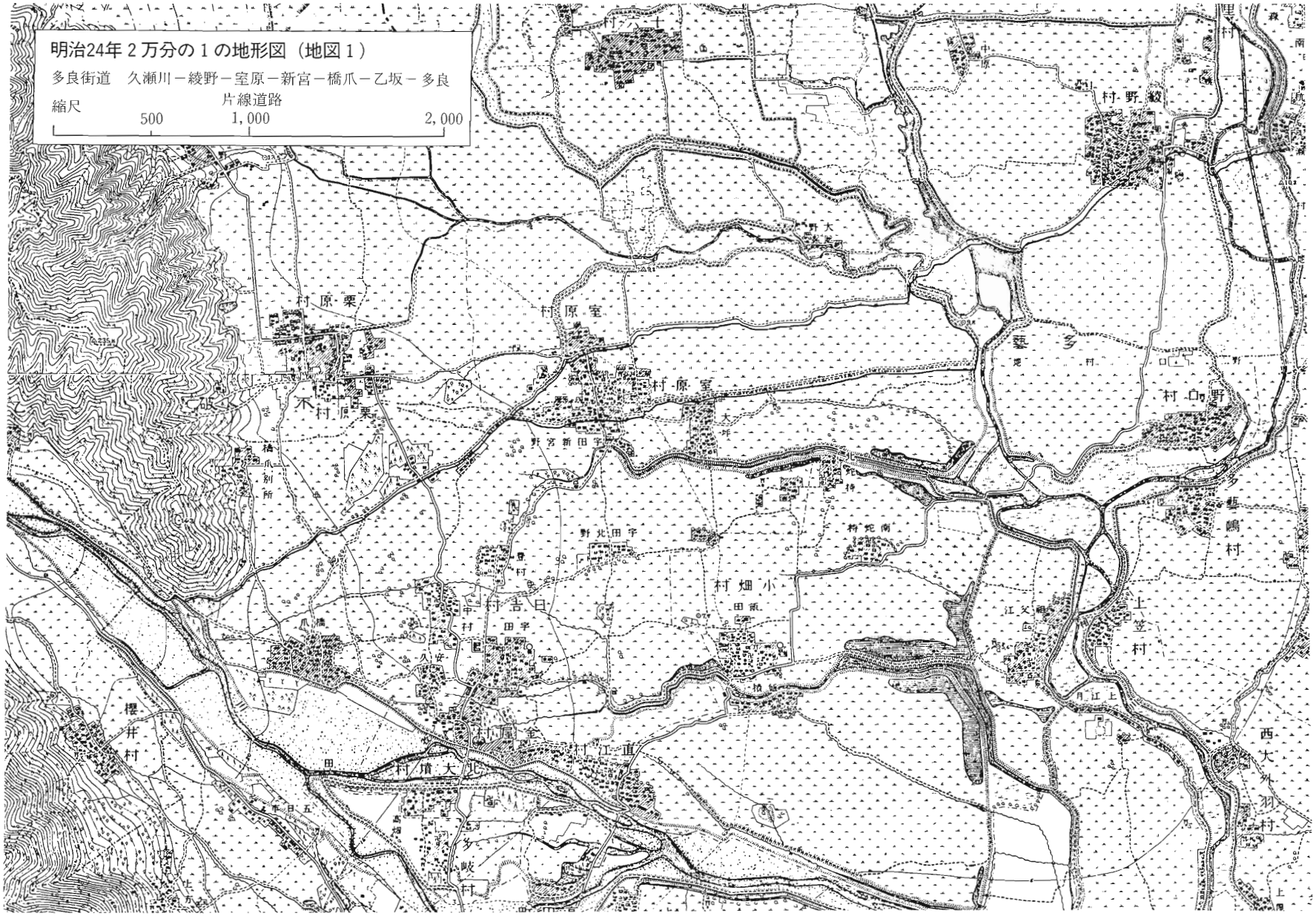
揖斐川を渡って、今尾、高須を経て、長良川、木曽川を渡船で越え、津島に行きました。

対岸の今尾渡船

今尾橋より渡船場を遠望する

◎担当委員　安田高・種田丹治

多良街道


明治24年２万分の１の地形図（地図１）
多良街道　久瀬川－綾野－室原－新宮－橋爪－乙坂－多良
片線道路
縮尺
500
1,000
2,000
村原栗
村原室
村原室
村原栗
橋爪別所
野宮新田字
野北田字
村畑小
村吉日
中村田字
村厚金
村江直
村埴大
櫻井村
多岐村
上笠村
西大外羽村
村野綾
村口野
多良
嶋村
村妃南
月江上
江文
大坪
八安
爪浦
畑
田
上

古　道

多良街道の調査について

多良街道は、現在の上石津町多良と養老町内の橋爪―新宮室原を経て大垣を結ぶ重要な古道でした。この道路が今日では、農村の発展によって、土地改良事業や道路の著しい整備が行われて消えたり、道筋が変更になって、道路の変化の跡がわからなくなって来ました。今ここで綿密な調査をして記録に残すことは、後世のために最も重要な問題となってきました。

今回、養老町においては、町内古街道を調査し郷土資料館に展示したことを契機にさらに調査を深め、記録や写真を整え本にして残すことにしました。内容は次の三点に分けて分かりやすくしました。

一　古道の多良街道

二　多良街道の歴史にみる往来

三　古道の多良街道はどう変わってきたか

多良街道の概要

中世から江戸時代に入ると、多良は旗本高木家の居所であり、上石津地方の産業経済の中心をなしていました。又、大垣は十万石戸田侯の城下町で西美濃の政治経済、文化の中心地であって、多良方面は大垣に深い関係を持っていました。

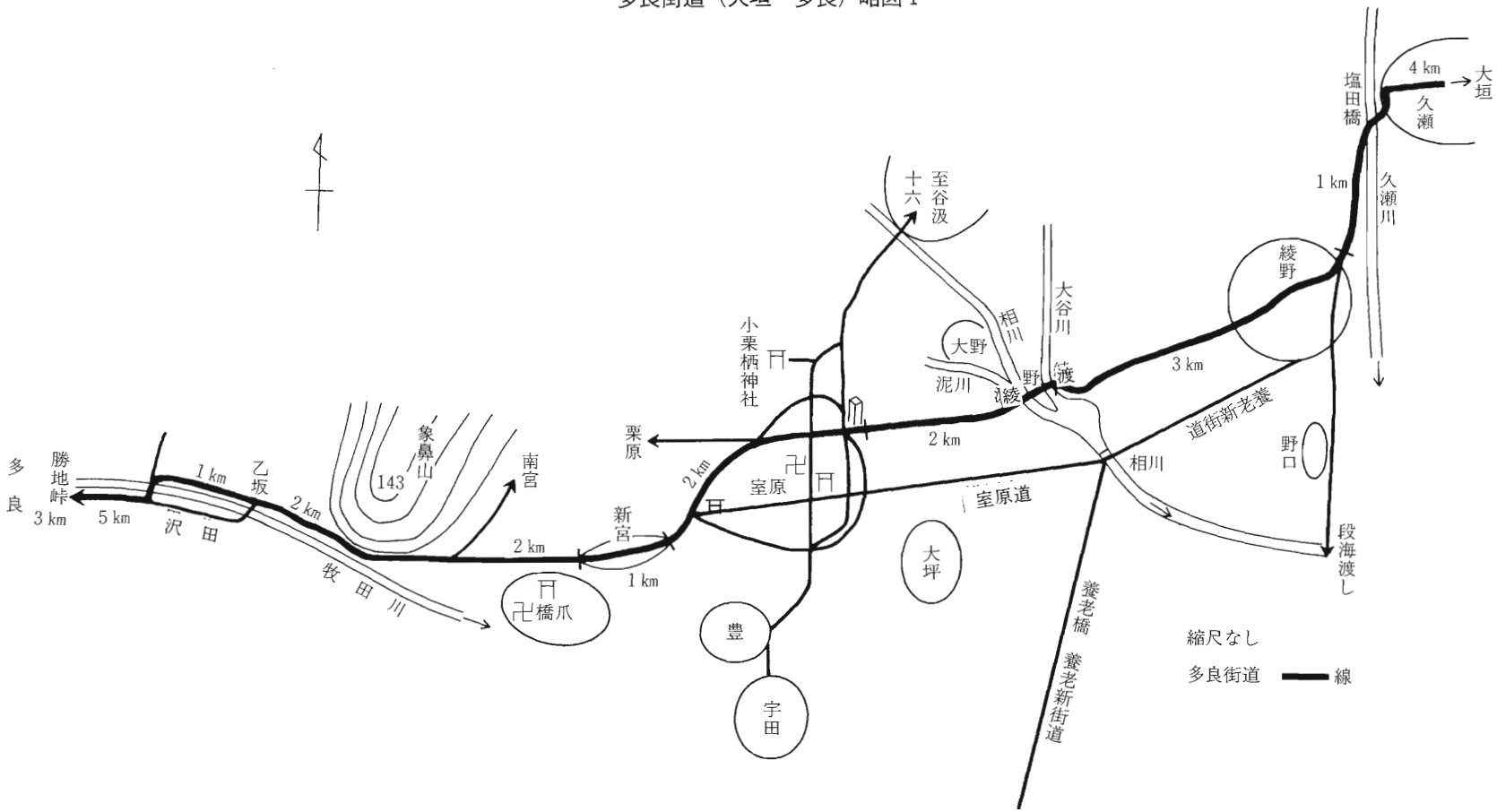
多良と大垣の最短距離を結ぶ多良―一之瀬―乙坂―橋爪―新宮―室原―綾野―塩田―久瀬川―大垣間の道路をこの地方の人々は多良街道と呼んでいます。道幅約二メートル、多良―大垣間約二十五キロ、養老町内は約七キロ、当時この道は多良方面の人々が大垣方面へ出る重要な道路でした。（地図参照）

この沿線の橋爪は古くから開け、象鼻山古墳、篠塚神社、念長寺等があります。室原も同様に古くから開け、小栗栖神社、熊野神社又古い寺々が存在します。今から約四百年前の関ケ原合戦には西軍三万余の軍勢がこの道を通った事も歴史が伝えています。

ところが、この道も大正三年に室原地内の耕地整理、昭和三十九年の綾野地区耕地整理及昭和五十年以降の日吉地区圃場整備によって多良街道が所々で消えてしまいました。まことに残念なことです。

それでは、今この変化の大きい多良街道を、昭和四十八年に調査した資料をもとに耕地整理で消える以前の道路状態を探ってみることにしました。

多良街道（大垣－多良）略図１



1、大垣から綾野

大垣の町の中心部から船町―久瀬川通り塩田橋―静里―綾野の村中を通り抜けて、さらに綾野の水田地帯の真中を約一、二キロ程西進すると大谷川の左岸に着きます。

塩田橋は杭瀬川に架かる大垣入口の橋で、文化年間、今から約二百年前の絵図を見ると、西久瀬川土橋となっています。この橋へは美濃路と養老街道、多良街道の三道が集って、昔は賑やかだったといいます。今は、この大垣入りの橋の位置を、国道に二一号線（美濃路）の真直ぐである、杭瀬川の五〇〇メートル上流に架けかえられたので旧塩田橋は淋れてしまいました。

塩田橋の右岸（鹽田）の石柱と側の大神宮の常夜灯。他に道標もある。

2、綾野渡から室原

大野輪中のすぐ下で西側の相川と東側の大谷川が合流します。その直前で相川と大谷川を別々に渡る「綾野渡」がありました。この渡しは明治十年頃に河川敷内に巾六尺（約一・八メートル）長十間（約一八メートル）の板橋が架かりました。これは大正二年に養老橋が架かり養老新道が開通すると（地図2参照）人々は皆その道を選らび、多良街道は全く淋れてしま

「綾野渡」現養老橋から200m上流にあり、西側堤防道路上から東を眺める。昔は前が相川の流路でした。今は草むらの河川敷となっています。

「綾野渡」堤防道から西へ下り、西に向かう多良街道（室原で中道という）正面は室原集落（平成５年写す）

ったと古老達は語っています。

さて、綾野渡の眺望ですが、この付近は濃尾平野の一角で堤防上からの眺めは格別です。近くは、綾野沖、室原沖の菜の花やれんげの花がじゅうたんを敷きつめたように美しく、うっとりさせると古老達は語っています。

多良街道に沿った小字五郎丸から出た山茶碗

塩田橋からここまで約三キロ、この渡しを越えて、西へ室原沖の水田地帯の中を通ります。この道を室原では中道と言い、八百メートル程西へ来たところが「五郎丸」続いて「茶園原（ちゃえんわら）」という小字（こあざ）名が残っています。

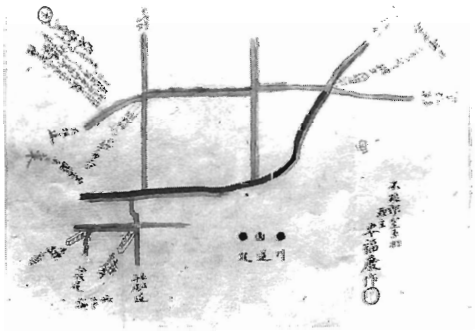
室原の人は、この五郎丸には、大昔、城があったとか、五郎丸が住んでいたと言い伝えています。そして茶園原を含めて、この地から山茶碗の破片が出ました。又小さい墳が三、四か所あったと、大正初期の耕地整理の作業をした人達が語っていました。すると、この付近はかなり古くから人が住んでいたに違いありません。この中道は低い水田地帯で少しの雨でも、たちまち浸水道路と化す悪道でした。この道路も耕地整理で今は真直ぐになりました。ここから更に五百メートル程進むと室原集落の東北隅入口の十字路です。

左　この十字路の道標、西に向いて立っている

「左　谷汲道　あら川凡一り　赤坂凡二り

右　大垣道」

とあり、この道標は現在は民家に保管される



下　明治17年に道標建立のための県へ提出した許可願いの添付図

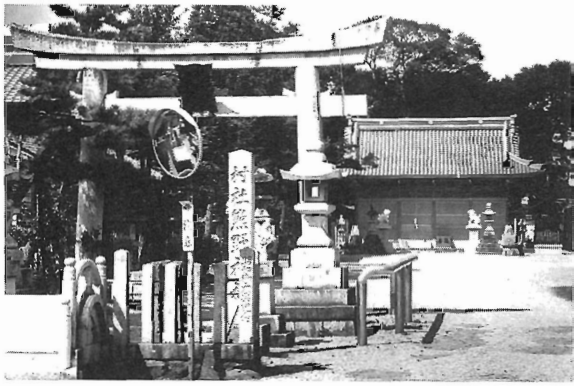
この十字路（地図1参照）は明治十七年に道標が建てられ、それによると「左　谷汲道、右　大垣道」とあって、当時は人通りもかなりあったようです。前頁の写真は当時を思い出します。

ここを西へ真っ直ぐに三百㍍進むと井畑瀬古の中央の四つ辻に出ます。大正の頃までは、ここに辻屋（つじや）という店屋があって、豆腐や酒を売って茶屋のような役目もしていました。この様子を村の老人達はよく知っていて、時々話題にします。南の角に大正十一年建立の石の大神宮の灯明があります。この四つ辻を右折れして北に約一㌔進むと泥川を渡り谷汲道と合います。

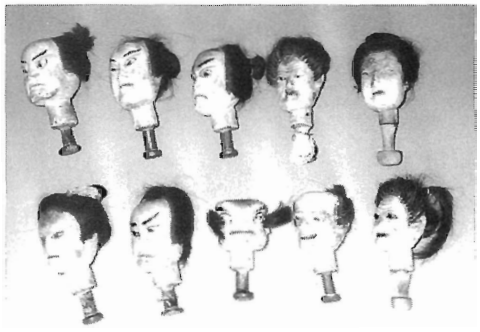
又この四つ辻は左折して南進すると、豊（とよ）から宇田へ約三㌔で着きます。

室原は多良街道中の大部落で古い歴史や文化財の多いところです。写真参照。

多良街道、室原地内の井畑十字路、大正11年建立の大神宮の灯明がある。左へ進めば豊・宇田に至る。右は谷汲街道、真正面は多良街道です（平成６年に写す）

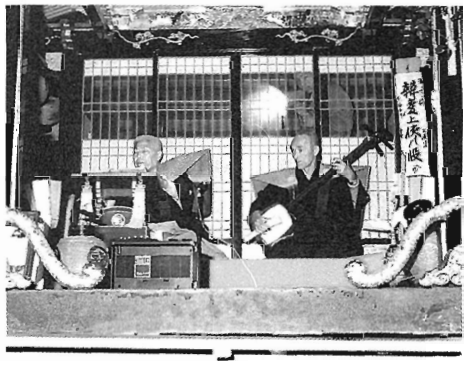


室原熊野神社



室原文楽　頭（かしら）　32あり　文政年間より伝う

十月五日室原祭曳軸



福源寺聖観世音　県文化財

右上　北尾春圃顕彰碑、名医春圃は正徳元年に朝鮮通信使医官と会談、内容を「桑韓医談」にして発行す

左上　福源禅寺、天正の再興、本尊聖観音、北尾春圃、石井三之丞の墓あり

左下　石井三之丞は石井兄弟復讐記にあり室原で返り討にあい無惨な最後をとげる、その墓

この四つ辻を百㍍程西進すると、境川の堤防道へ出ます。この堤防はここから北方へ二〇〇㍍の地点で泥川堤防と連なっています。この堤防を一〇〇㍍程南進すると十字路に出ます。ここには明治十七年の石の道標が立っていました。右は栗原表佐で真直ぐ堤防道を行けば多良街道です。一五〇㍍前進して、左側に室原区色目瀬古の新宮神社があります。ここで新宮神社の南側へ養老橋から真西に一直線に進んで大坪の北側を抜けて室原の南側（不破郡と遠賀郡の境）を通って来る道と合一します。この道は多良街道の脇道で終戦後県道牧田線となりました。

森は色目新宮神社、境川に沿って多良街道が西に伸びて日吉新宮に連る

日吉新宮の村中を通る多良街道、正面は西へ伸びている

3、日吉新宮から橋爪の象鼻山下

この合一点へは、昭和四十五年に三菱バーリントン工場が北にでき、又一方、日吉地区圃場整備によって南北に六㍍道路が貫通しています。それを横断して二㍍の狭い道を五〇㍍程西進すると新宮の入口であります。この付近は慶安三年（一六五〇）の大洪水で牧田川が氾濫し新宮野が出来たというところで大正の頃まで小松原が残っていました。新宮地内は約一㌔で西端に出ます。そこで高田垂井道（大正十三年県道となる）を横断して三〇㍍西進すると新宮の氏神の明治神社に着きます。さらに巾二㍍程の田圃道を西南に二〇〇㍍程で一本松に着きます。この一本松は関ケ原合戦に西軍の敗残兵が逃げ遅れ、力盡きてこの松の木の元で鎧冑のまま死んでいたと言います。昭和六十年代になると工場が拡張されて、橋爪の人びとが沖の目安にしていた、この一本松も無くなってしまいました。

新宮の明治神社

新宮の神社から一本松を写し、象鼻山を望む
昭和53年　耕地整理以前　村上肇氏撮影

一本松から更に西南へ田道を一粁程進むと岡鼻の東山麓に出ます。そこは別庄方面へ進む南宮道との分岐点になっています。左の写真を見ると地蔵堂と道標があります。この地は橋爪の水田地帯でありますが大昔はここらが橋爪の集落であったようです。水害が多かったので、東方へ移動したといいます。

橋爪の岡山下で多良街道と南宮街道が分かれるところ。地蔵様とその側に道標がある

現在芭蕉の句碑の側へ移動す
右　大垣道
左　たる井道
　　なんぐう道

橋爪は室原と共に古い集落で歴史や文化財が多く残っています。

又、標高約一四三㍍の象鼻山は古墳群の山として有名です。

象鼻山は標高 約143ｍ、古墳群で有名、60基以上あり、遠足や見学で登山者が多い。左先を岡鼻と云い多良街道が山麓を左へ回り乙坂へ行く

芭蕉の句碑　明治２年建立　村上拙男其鶴
杜鵑声（ほととぎすこえ）　横当婦（よこたふ）や水農上（みずのうえ）

篠塚神社は古社で神名帳にのる、祭神は大酒（おおざけ）大明神、慶安3年水害にあう（橋爪、平成2年写す）

昔のままの残れる多良街道（橋爪の岡鼻の杏園さんの碑の前）（平成６年写す）

4、岡鼻山麓から多良まで

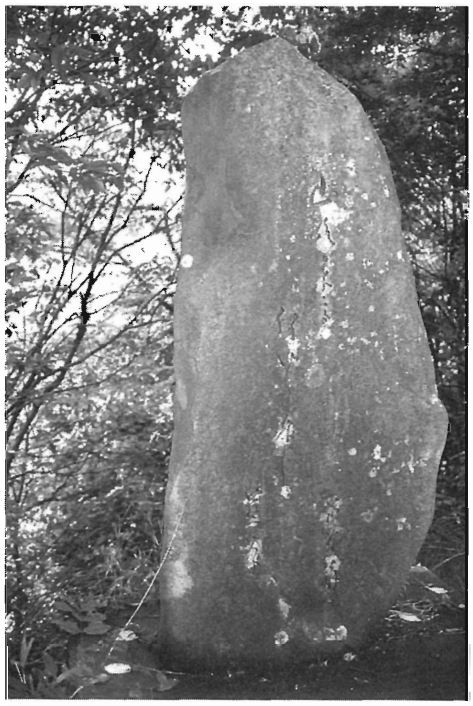
この分岐点を西進し岡鼻山麓に沿って西方に進む道は左側に牧田川の景勝を眺め、右側は乙坂山の景、牧田川を上流に向って約一キロメートル進むと乙坂に着きます。ここで牧田川を渡って沢田に入ります。沢田の町筋を通り抜けて西進し、現在の広瀬橋の南岸の道を山麓に沿って西進し和田に至ります。

この乙坂で牧田川を渡らないで、約一キロメートル上流に向って進むと山村に至り、現在の広瀬橋の左岸もとで西伊勢街道と合流します。ここで川を渡り沢田から来た道といっしょになります。ここは「上石津の町史」によれば「明治五年石津郡牧田明細帳」に「ここは広い瀬のため、時々川の瀬が変り一定でない。従って、その時の川巾に応じて、長い時は二十間余短い時は十間余の板橋を架けて通行している。また渡し場が一か所あって、馬越船が一艘あり、洪水により板橋が損じた節は船で対岸へ越している」と記す。この渡し場は明治二十年頃まであったといいます。明治二十二年になると、ここに木橋が架かりました。

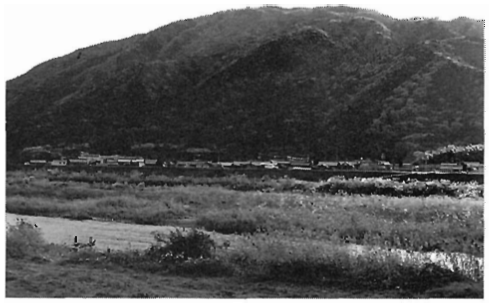
和田から一之瀬―勝地峠―多良と漸く終点となりますが、勝地峠は標高一一八メートルで多良街道最大の難所です。一之瀬、多良では、この難所をさけるため絶えず努力がなされて大正十二年には県道に昇格させて、多良峡間の大改修が行われ三メートルの巾の車道が開通して、大いに便利となり、勝地峠は殆ど人影を見なくなりました。この多良街道は牧田で、西伊勢街

道につながっていますので伊賀上野にも通じて、芭蕉も通ったでしょうか。勝地峠には文政十三年三月（一八三〇）に建った「山路来て何やら床し菫草」の句碑があります。又、幕末頃には勝地番所もありました。

その後、多良峡回りの道路も時代の進歩によって、最短距離とスピード更に安全のために、トンネルを昭和五九年（一九八四）に完成させました。このトンネルは第一、二、三と三つ連続していて約一八〇〇㍍巾六、五㍍、高さ一、七㍍、多良峡回りの道路の半分以下に距離が短縮されました。



勝地峠の芭蕉の句碑
「山路来って何やら床し薫草」

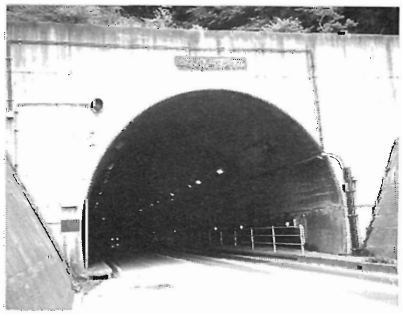


牧田川を乙坂から沢田へ渡る付近の風景
（平成６年写す）

沢田の町並、今も昔のまま
（平成６年８月写す）

一之瀬から多良へ越す旧道の勝地峠の標柱

牧田川の多良峡区間の岩を割って３m道路を川に沿って改修(大正12年)しました。



上石津第一トンネル
一之瀬側より写す(平成６年７月)

二、多良街道の歴史にみる往来

多良街道が何年前からあったかは、よくわかりませんが別名で「山家道」と云って平地と山里を結ぶ重要な道ですからずっと古い時代からあったに違いありません。今、この道の往来についての歴史や古老達の話をまとめてみると、歩行者の時代には、さまざまな人が通って興味と、この道の重要さを覚えます。ここに二、三例をあげて参考にします。

①、木下藤吉郎が多良街道を通り栗原山へ来ました。

竹中重治が永禄七年（一五六四）二月に稲葉山城を奪取後、栗原山に閑居していたとすれば、その頃、藤吉郎は墨俣を本拠として、稲葉山城攻略に活躍していた頃ですから、竹中重治を迎えに来るには、多良街道が一番の近道ですので多分この道を馬で駆けたに違いありません。

②、山科合戦、石山合戦（天文年間から始まる）参加の室原部隊

正海寺、四世賢順外士卒五名、雑兵二十二人

長願寺、三世了順外士卒四名、雑兵二十七人

右部隊は室原を出発して多良街道を西進、多良、時を経て、山越え、又、伊賀越え回りで戦場に赴いたのです。

③、関ヶ原合戦の西軍主力部隊が多良街道を通りました。

慶長五年（一六〇〇）九月十四日関ヶ原合戦の前夜、西軍の主力第一番隊石田三成七千、第二番隊島津義弘（惟新）千五百、第三番隊小西行長四千、第四番隊宇喜田秀家一万八千が、青柳、野口を経て多良街道を西進し、岡鼻を過ぎ乙坂牧田を経て、関ヶ原に至ったと言われています。

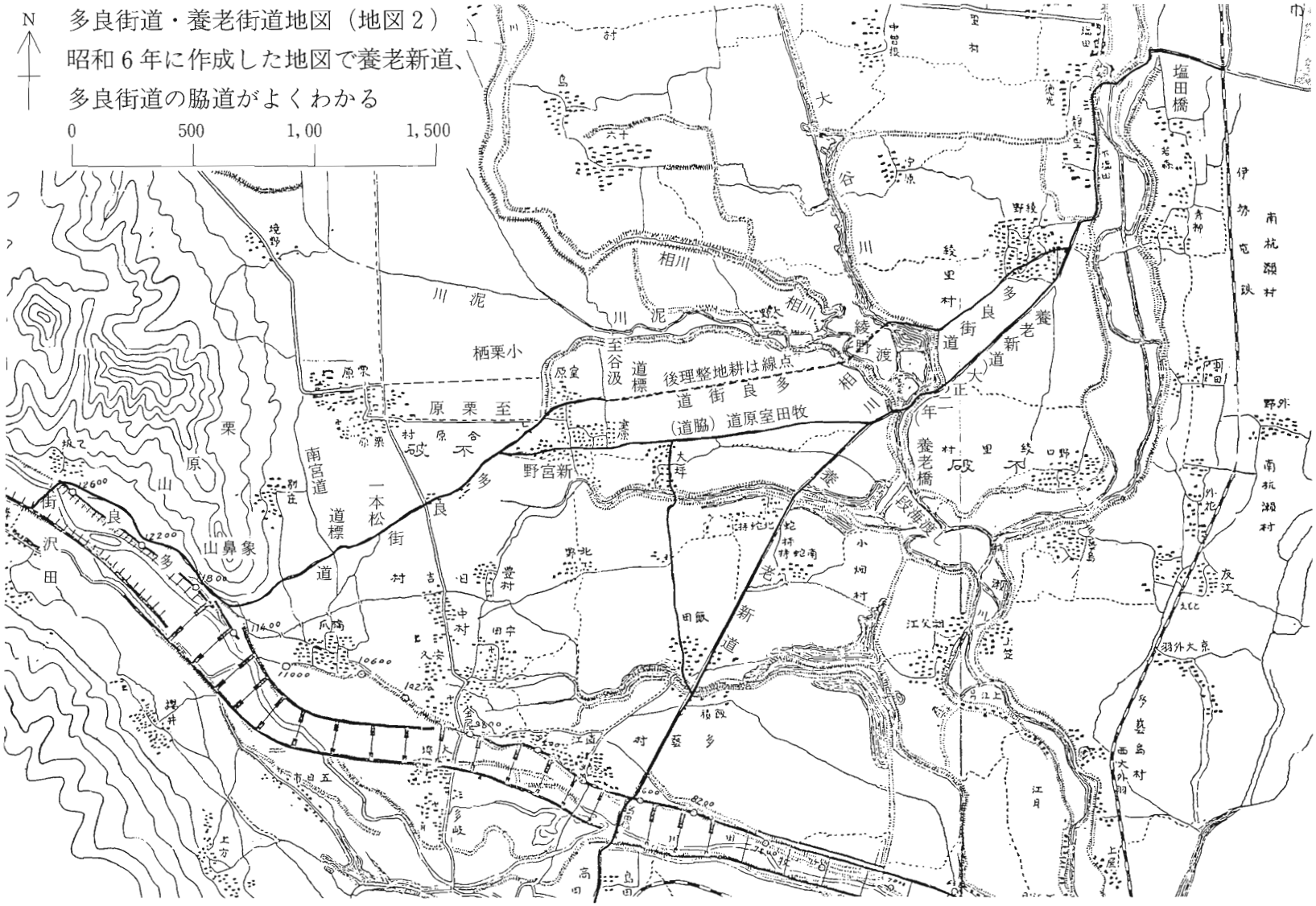
篠つく雨の中を三万五千の兵達は巾七尺約二㍍の泥濘の道を強行した有様はどんなでしたでしょうか想像に絶するものがあります。

④、多良の殿様高木家は、代々水行（みずゆき）奉行を勤められ、度々この多良街道を通られましたことでしょう。

又、時代はずっと下って幕末の頃のことでしょう。室原では広い田圃の真中を多良街道が通っているので、春うららかな日、田起しをしていると、お篭で多良のお殿様が通られます。すると、どれ一服しようかと、夫婦共に畔に腰を下ろして見物しました。二㌔もの長い田道は、紫雲英の紫の花、菜種の黄色の花、まるで、じゅうたんを敷きつめたような素晴らしい景色の中をゆうゆうとお篭が行く、つい綾野渡へ着かれるまで休んでしまった。これは私が若い頃、古老達から聞いた話です。

また明治の頃までは、山家の女の人達が炭を二俵、背板にのせて、大垣へ行く姿を時々見たと老人達は語っていました。

⑤、大正天皇が皇太子殿下の時、多良街道を大坪まで通られました。明治四十三年（一九一〇）四月二十一日に養老の滝へお成りになったからです。その時、大垣から旧養老街道、綾野から多良街道を西進し、大谷川と相川の綾野渡は当時、板橋が架かっていました。人力車で通り大坪を経て養老へ向かわれました。



多良街道・養老街道地図（地図２）
昭和６年に作成した地図で養老新道、
多良街道の脇道がよくわかる

三、多良街道はどう変っていくか

1、大正時代になって多良街道の通行は急に衰えました。

明治末期頃になると、我国の人口の増加、産業経済の発達は、人の移動や物資の輸送のため、道路の整備が必要となって来ました。道幅の拡大、健固な橋梁によって、商工都市を最短距離で結ぶ必要から新道が急に普及し始めました。

①、多良街道においても大谷川、相川の「綾野渡」は明治中期に巾六尺（一、八メートル）長さ一〇間（一八メートル）の板橋が架かる（明治十七年古文書）とありましたが又その頃から室原輪中の真中を通る多良街道（室原では中道と云う）をさけて、相川右岸の堤道を二〇〇メートル程下がって、そこから西へ伸びる除道（よけみち）を進み、大坪の北側を抜けて、室原の南境の道に続き室原新宮の西端で多良街道と合します。この道は多良街道の脇道（後に牧田室原線県道指定となる）であり又、養老街道の大坪経由道ともなって利用者も次第に増してきました。

○多良街道が室原輪中の真中を通っているわけ

多良街道は俗に、山家道、とも云って、山家と平地を結ぶ重要な道路で古く中世以前からあったものと推察されます。その頃は北に泥川、東に相川が流れていたでしょうが、輪中はずっと後の近世に至るまでなかったのでしょう。この山家道は、自然の形で室原沖の中を比較的小高い土地を選んで通っているようです。それが今、輪中の中で見ると、多良街道がなぜ、あんなに低い輪中の中を通っているのかと誰もが疑問を持ちます。

室原輪中は古文書によると宝永六（一七〇九）年に出来ています。その時、多良街道は輪中の中に取り囲まれてしまいました。

そして、この輪中の構築が多良街道に新しい脇道を生みました。相川の段海、今の養老橋付近から室原と大坪の境を排水路の水除として九百間（一六〇〇メートル）構築し、室原輪中が成立しました。その後この除道が西へ真直ぐ伸びて新宮で多良街道に合するようになりました。

②、新養老街道が通ずると大垣―多良方面の交通は高田経由に変りました。

新養老街道（地図参照）は大垣―養老間であるが、綾野―養老橋間は大正二年に完成しました。それに続いて、養老郡内の建設も行われて大正九年四月一日には県道大垣―高田線となります。

又、大正二年には、養老鉄道の池野―養老間が開通し大正十二年には時―高田間の定期バスが開通し、多良方面の人々は高田経由の道を選び多良街道は全く通る人が無くなりました。

③、県道牧田―室原線（県道一五三号線）の設定

牧田地区の和田―乙坂―橋爪―新宮までは多良街道ですが室原地内は養老橋まで多良街道の脇道です。この県道設定はずっと遅れ終戦後ですが、多良街道が重要な道であることを県も認めていたからでしょう。

この路線は現在も存在していますが、日吉地区の圃場整備によって新宮―橋爪間の多良街道が消えて、新宮神社西側から幅五メートル道を南へ五〇〇メートル程進み、豊（とよ）の交差点で真西へ一直線に進み象鼻山下で乙坂道に連る道路に変っています。

④、終戦後の自動車の発達は道路網を一変させました。

終戦後の産業経済の発展は、人の通行、物資の輸送のため自動車が著しく発達し、車道整備は緊急の問題となりました。

ちょうど、これと合せるよう昭和五十年代になると、多良大垣道に関係する日吉、小畑地区の圃場整備が行われ、計画

的な道路網が完成しました（下の地図参照）ので目的地に自分の好きな道を選ぶことが出来るようになりました。一例をあげると大垣方面から上石津方面へ車で行くには、以前は養老街道を高田回りでしたが、今日では養老橋を渡ってすぐ西へ向い牧田室原線を利用してもよいし、又蛇持の交差点から真西へ農業広域道路を進んで象鼻山下で乙坂道に繋がってもよいが何れにしても大きな距離の短縮になりました。

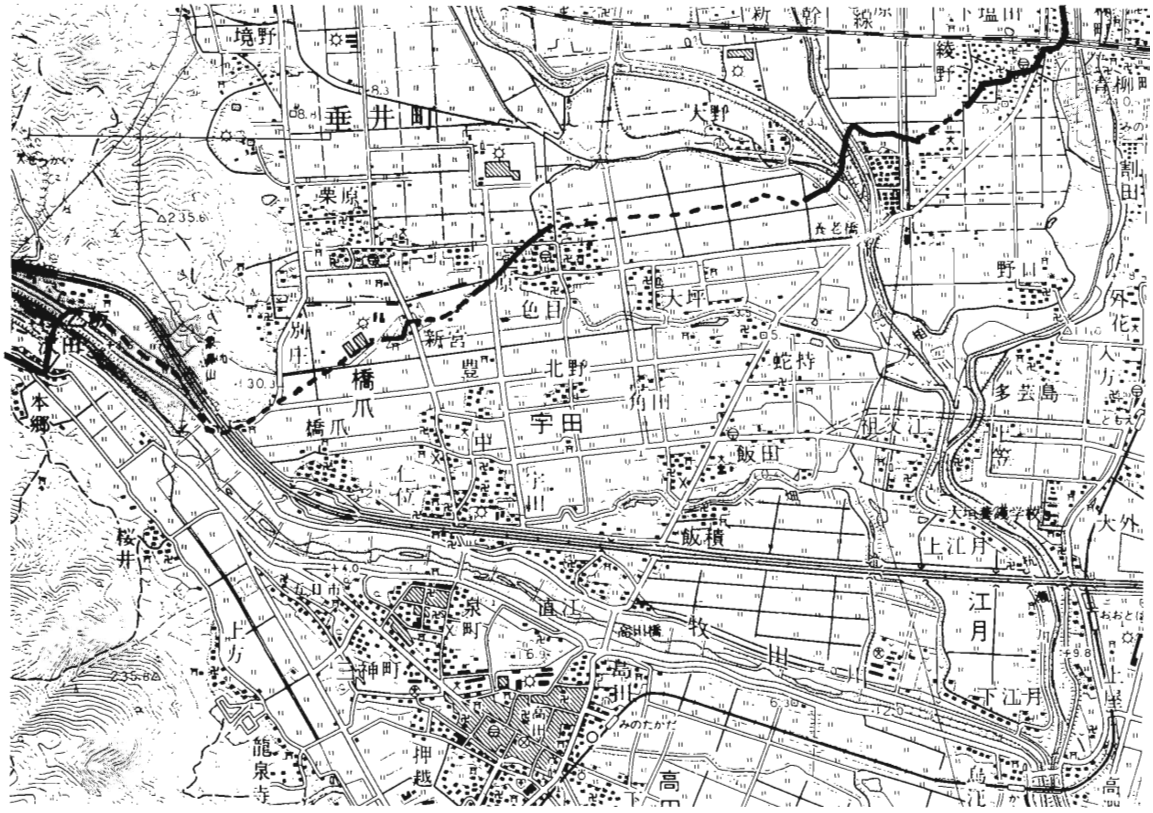
なおここで各地の圃場整備で多良街道の消えた区間をまとめてみますと、大正三年に室原東沖（室原輪中）で約二〇〇〇㍍、昭和三十九年に綾野西沖で約一、五〇〇㍍、昭和五十年代に橋爪―新宮間で約一、五〇〇㍍です。

以上の様に、現代に至っては車道の発達が著しく、歩行時代の古道は全く顧みられなくなってしまいました。

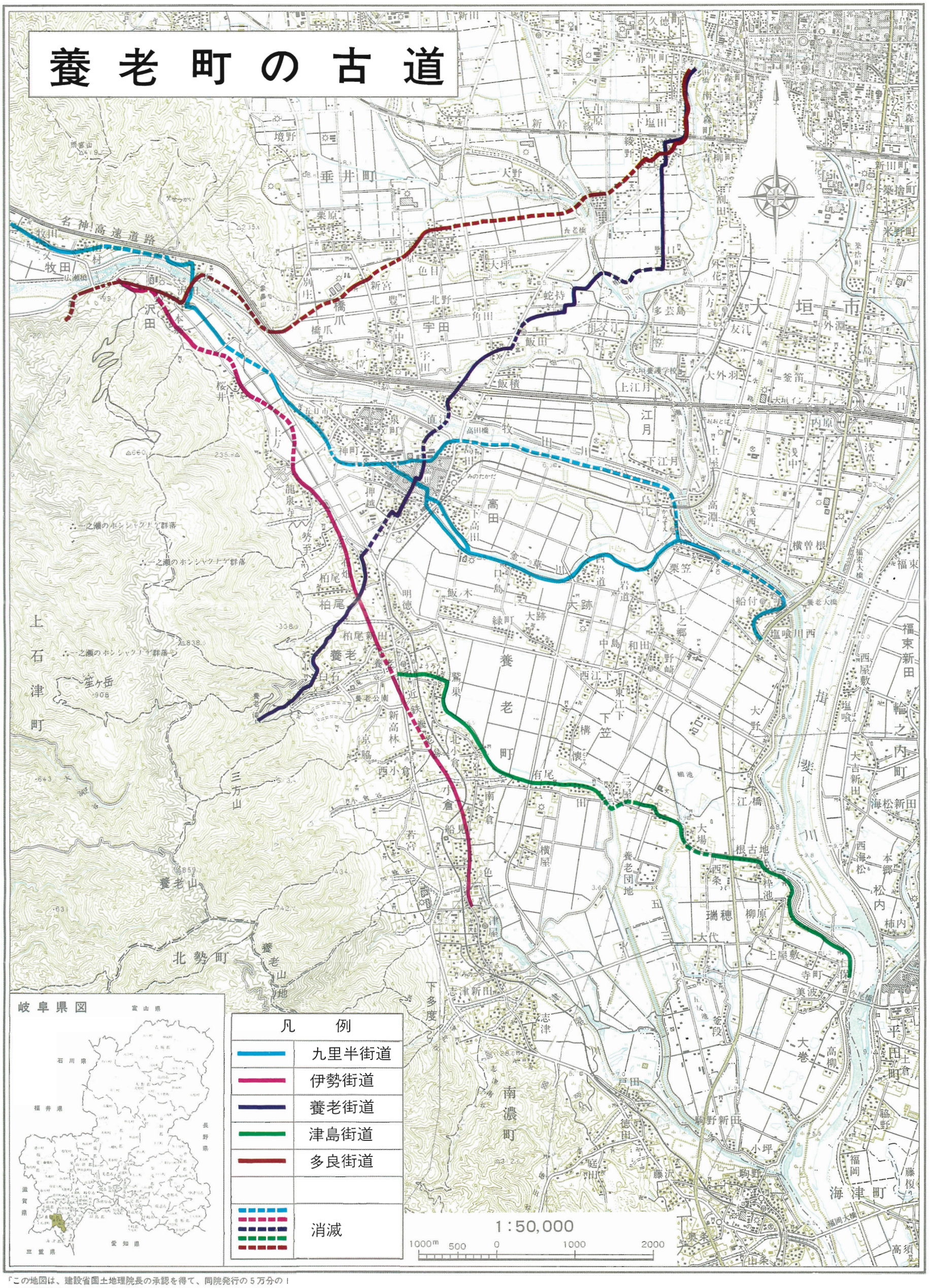
下欄に圃場整備を終って水田地帯に新道路網が完成した、室原地区、日吉地区、小畑地区の圃場整備完了後の地図を掲げて、参考にします。

◎担当委員
安福彦七
藤田信誠

右道標は新養老街道（大正二年）の養老橋を西側へ渡ると二叉路になる、その分岐点に立っていた。現在は大坪の民家に保管されている。



養老町の古道



「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の５万分の１地形図を複製したものである。（承認番号）昭59部複、第188号」

用語解説

イヌマキ　マキ科の常緑喬木で葉は針状、五月に小花を開き種子は緑色で基部に続く仮種皮は赤色であります。材はいろいろの器、特に桶類に適しています。

圦

除や落江に設けられて、必要に応じて扉を開閉出来るようになっていて、落江の逆水を防ぐと共に、必要なときは門扉を閉じて用水を引き入れることができました。

浦高札

江戸時代に海難予防・救助や海難にまつわる不正取締りの重要な法令を箇条書きにして各地の港や海岸に立てたもので、湊高札、廻船制札ともいいます。

尾張藩では、重要な湊ある名古屋・熱田・蟹江・佐屋・船附に立てられていました。

難破船があった時は助船を出し、荷物・船具を拾い掲げた者にはほうびを与える。船荷を盗んだ船頭は死罪にする。外国船と密貿易をした者は厳罪に処する。船賃などはきまりより高くしてはいけないなどのことが定められています。

延喜式

平安中期の法典。五十巻あります。宮中の年中儀式、百官の儀、諸国の例式などを漢文で記したもので、延喜五年（九〇五）醍醐天皇の命により、藤原時平などが編輯にかかりましたが施行されたのは時平没後康保四年（九六七）でした。

落江

輪中をとりまく川の方が輪中内の土地より高いので、長い水路を築いて水を低地の方に落とし、自然に排水できる所まで導きました。この水路を落江といいます。

押堀

堤防が切れて猛烈な勢いで押し込んできた水のため、田畑地などが深く掘りとられて池となった場所を押堀といいます。反対に、その付近には押し出された土砂が積もって高くなります。この所を砂入りといいます。

切れた堤防の跡はとても深いので、そこを避けて新しく堤防を築きます。そのため、新しい部分は不自然な屈曲をしています。

押堀は領主へ納める年貢は免除されました。

砂入り

落堀ができた時、そのえぐられた土のうち、粗い砂や礫は落堀より少し離れた濁流の進行方向に堆積します。そこは水田としては利用しにくく、畑や宅地に利用されました。

柿

木材を細長く削りとった木片のことで、屋根を葺くための物ですが、お経を書いたりして浬めました。柿落しとはこの字を使います。

旧十三ヶ村落江　現在、形の残っているのは、有尾輪中堤の北から、三ッ屋の西を流れて、下池を通り、津屋川に流れている川です。加入地域は、鷲巣・小倉・大跡下笠・津屋・志津・駒野新田・釜段・田・横屋・有尾・下池西・下池東です。

明治時代の前は、上流の十三の村々の水がこの川に集まり、時々、大雨が降ると洪水を起こしました。

式内社

延喜式という平安時代の法典に記載されている神社を云います。養老町内には郷社御井神社の外、郷社多岐神社（三神神社）、郷社久久美雄彦神社（沢田）が式内社として記載されてあります。

多羅葉

（モチノキ科）近畿以西の暖かい山地に生える常緑樹とありますから、岐阜県では、やや珍しい樹木であります。多羅葉の語は、もと貝多羅葉の略で、本来、インドなどで経文を書いた多羅樹の葉(patara)を意味しますが、たらようの葉を火にあぶると、葉裏にビルマ文字の経文によく似た丸い模様の連続があらわれるところから、この木を「たらよう」と呼ぶようになりました。また、この木の葉うらに鉄釘で字を書くと、はっきりと残りますから俗に「字書きば」とも呼ばれています。

天井川

河川の運搬して来た砂礫が堤防の間を埋めて、河床が周囲の平地面より高くなった川のことを天井川といいます。

梛の木

新宮市のような暖かい地方では珍しくないが、梛の成長の北限岐阜県では珍しい。葉脈が笹の葉の様にたてになっています。雌雄別株で葉はお守りとして、珍重されています。

濃州徇行記

著者、樋口好古は尾州藩の役人で、尾州領内を悉く巡行し、尾州徇行記・濃州徇行記を寛政年間（一七八九～一八〇〇）に編纂しました。

樋門

用水の取入れや悪水排除のため堤防を横断して作られた水路の門に扉があるもの。外水が高くなると扉が自動的に閉じて輪中内へ入水しない装置になっている排水樋門もありますが、用水の場合は必要に応じて扉をあけて水を取り入れます。

艀

平田船とも書きます。和船（日本式の船）の中では艀は大型船の代表であって、船底が広く平らかで喫水（船体が水面下に入る部分）が浅いのが特徴で、明治までは河川舟運の主役でしたが、川蒸気や鉄道の普及によって姿を消しました。

舟運に使われた船の石数はだいたい次のようです。

艀（五〇石～一三〇石）・大鵜飼船（五〇石）・中鵜飼船（四〇石）・小鵜飼船（二〇石～二五石）四ッ乗船（一〇石）

一石は木材十立方尺（約〇・二八立方メートル）であります。

マンボ

高速道路をくぐりぬけるトンネルをいいます。インターより数えて番号をつける。

三野国

美濃国の最も古い用字で、青野・大野・各務野の三つの野。（美濃明細記）

参考

国名　三野国から御野国となり、最後に美濃国となった。（野村忠夫著　古代の美濃）

遊水池

河川の一部の幅をでき得る限り広くしておいて洪水の時、そこに一時水を貯えたり、又は、低湿地へ水を導き入れ、緩衝池として堤防の破れるのを防ぐ場所、遊水池

は平野部で河川の傾斜が急から緩となる箇所に多く見られる。

輪中（わじゅう）　低温地帯に住む人びとは新田を開発する時や、自分達の生命・財産・田畑などの安全を守るため、一個または数個の村落を堤防で囲って水災を防ぎました。この堤防で囲まれた地域を輪中といいました。

しかし、この運命を共にする地域内の人びとが協力して水防協同体を形成するようになり、この組織を輪中と呼ぶようになりました。

養老町南部の多芸輪中の中には、たくさんの小輪中がありました。このように大きな輪中の中に更に小さな輪中が集まっている場合を複合輪中といいます。

鰐口（わにぐち）　仏具、打響、打鳴、打具、打金、金口鐘、張合ともいう。法楽器の一種。社殿・仏堂前の軒下につるし、鈴を偏平にした円形で、下方に横長の口をもつ鋳銅製のもので、側面には環状の耳と呼ぶ取っ手がつき緒でつり下げる。参拝者は布で編んだ綱を振って打ち鳴らす。（角川日本史辞典より）

わびすけ　椿の一品種　猪口状の小輪花を開き、茶花として愛好されます。

参考文献

養老町史・郷土の治水・養老町の文化財
室原の歴史（安福彦七著）
綾野物語・上石津町史・不破案内・大垣市史
輪中その展開と構造（安藤萬寿男編著）
養老讃歌・輪中をみる（西脇健治郎著）
濃州徇行記（のうしゅうじゅんこうき）

あとがき

郷土資料館の一隅に、特別展示室が作られ、町内の文化財や先賢の遺墨などを展示してきました。平成五年からは、最近急速に失われつつある古道を調査して、その成果を展示することになり、伊勢街道、養老街道につづいて、九里半・津島・多良の三街道を同時に展示しました。古老の記憶を頼りに、先人の足跡を一歩一歩踏みしめながら作られた地図と写真、沿線の文化財や伝承など展示を終った後もぜひ残したいという委員の熱意が実を結んで、この本が出来ました。

各街道にはそれぞれの顔があり、表現もまちまちですが、各委員が自分の足で調べた足跡であり、街道自体も絶えず移動を繰り返してきていますので、不備の点はお許しいただき、お気づきの点はご教示くださいますようお願い致します。

編集委員（順不同、敬称略）

委員長　藤田信誠　　委　員　中村泰治
委　員　田中育次　　安福彦七
種田丹治　　安田　高
田中憲策　　佐竹米市
渋谷保之　　西脇健治郎
日野泰道

なお、研究、執筆に精進された、西脇健治郎氏が刊行を待たず他界されたことは、まことに痛惜の情に堪えません。

養老町の古道

発行日　平成七年三月一日
発行所　養老町教育委員会
編　集　養老町郷土資料館協議会
印　刷　サンメッセ株式会社
TEL〇五八四・八一・九一一一

『養老町の古道』　正誤表

	ページ	段・行	正	誤
発刊にあたって		6	ずっと	づいと
九里半街道	P 8	上段・17行	船で運べば楽に	船で運べ楽に
伊勢街道	P33	上段・ 2行	南北隅	東隅
	P34	下段・ 3行	東西に通ずる道	西進する道
養老街道	P54	上段・8･9行	(境内からの出土品は県重文)	(出土品県重文)
津島街道	P64	下段・ 9行	三人の墓と	三墓の墓と
多良街道	P79	上段上右写真説明2行	横堂婦	横当婦
	P80	上段左写真説明2行	「山路来て何やら床し菫草」	「山路来って何やら床し薫草」